
月夜の約束

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の約束

【Nコード】

N2519B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

孤独な吸血鬼ブレイズと、おしゃまな少女パティスは、月夜の晩にある約束をした。

ナスターが死んだ。

もつずいぶんと長いこと、ブレイズの唯一の話し相手だった黒い犬が――。

水に弱い「素材」で「創られた」犬だったから雨の日には外に出さないよう気を付けていたはずなのに。

ナスターはブレイズが相手をしてやれない間、じっとおとなしく待っていてられる玉ではなかった。少しでも隙間があればいつでもふらりと出て行ってしまう、困った癖のある奴だった。

それはまるでナスターを創ったもう一人の性格を現しているようで、正直憎めない部分のひとつでもあったのだ。

だからナスターが自分勝手な振る舞いをしててもブレイズは本当の意味で腹を立てたことはない。

ナスターからそういう面を奪ってしまったら、ナスターがナスターではなくなってしまう気がしたから。

でも、それがいけなかったのかも知れない。

もう少し厳しく躰けていたならば、こんなことにはならなかったのかも。

ナスターはただ、ナスターらしく行動しただけなのだ。自分が眠っている間にこっそり屋敷を抜け出してしまった愛犬を責めることはできない。

でも、今回は生憎雨が降り出してしまったのだ。

雨は嫌いだ。

月も星もない、真つ黒な夜空は本来心地よいはずの闇を、言いようのない拒絶で埋め尽くす。そんな雨の晩は呪われた身で出歩くことはままならなかったから。

だからブレイズは雨が嫌いだった。

いつも通り日没とともに目覚めたとき、屋敷の中にナスターがい

ないことはすぐに分かった。

屋敷の裏口にほんの少しの隙間を見つけ、チツと舌打ちしたけれど、今更どうしようもない。

晴れた晩ならすぐに探しに行くことも出来ただろう。

しかし、生憎その夜はしのつく雨に町全体がすっぽりと包み込まれていたから。

だからブレイズは外に出ることができなかった。

太陽、聖水、十字架、流水、ニンニク。

それらが彼の苦手なものだった。

逆に大好きなのは、生命力あふれる人間の血。

そう。ブレイズは人間たちが呼ぶところの吸血鬼という存在だった。

生まれながらにしてそうだったのだから吸血鬼として生きていくすべしか彼は知らない。

けれど、だからこそ学習したこともある。

ひとつ。

太陽光は最も恐れるべきものである。もしもに備え、寢床は地下室にあつらえるべし。

ひとつ。

昼間動けないぶん、人間より分^ぶが悪いことを知れ。即ち、人間の血は無闇に吸うことなかれ。

ひとつ。

昼間のボディガードとして使い魔を大事にすべし。

ひとつ。

教会には近付くことなかれ。

ひとつ。

雨は流水と同じ。悪天候の晩は外に出ることなかれ。

ひとつ。

食して食べられぬこともないが、人間の食料を迂闊に口に入れる

ことなかれ。人間は隠し味にニンニクを使うことがある。

雨が止んだのは結局ナスターを見失ってから三日目の晩のことだった。

何日も降り続いた雨は、ナスターを元の紙切れに戻すだけでは飽き足らず、ぐずぐずの黒い塊にしまった。

かろうじてナスターが放つ気配をたどって排水溝のグレーチング（格子状の蓋）にひっかかったそれを見つけたブレイズは、いたたまれない気持ちで残骸をかき集めたのだ。

「馬鹿犬。雨に濡れちまったら紙に戻るって何度も言っただけで聞かせたじゃねえか」

広い屋敷の敷地の片隅に小さな穴を掘りながら、無意識に悪態が口をつく。

それは大切なものを失ったことに対する行き場のない怒りの発露。そんなこと、認めたくはないブレイズだったが、拒否すればするほどそれが正解なのだと実感する。

ナスターがいなくなってしまったことで、果たせなくなってしまう約束があることが、実は一番辛かった。

「クソッ！」

またしばらくの間、一人で暮らさねばならない。しばらく、というよりもしかしたらこの先ずっと、になるかもしれないという不安は考えないようにした。

「俺じゃ、犬は創れねえしな」

本当は、犬はおるか猫だってあやしい。

そこらへんは棚上げてぼやいてから、どうしようもない虚無感に襲われそうになる。

東洋のどこぞの国の文化だという、折り紙というやつは、不器用で大雑把なブレイズには向いていなかった。

何度も何度も折り方を教えようとしたナスターの生みの親も、最後には諦めて沢山の予備を作ることにしたくらいだ。

そして、このナスターが最後のひとつだった――。

折り紙の犬に自分が息を吹き込めば、使い魔として新たなナスターが誕生するのだが、ブレイズは命を与えるべき対象のそれを折ることができない。

「あーっ！ もう、やってらんねえ！」

力任せに掘り散らかした穴に、ボロボロになった黒い紙切れを、無造作に放り込む。

ぱっと見、投げやりに見えるやり方だが、今までの粗野な態度とは打って変わって動きがスローモーションなものになる。それは、その檻裡切れがブレイズにとって大切なものだったことを容易にうかがわせた。

「今まで有難うな」

一番言いたかった言葉を最後の最後にぽつりとつぶやくと、思いを断ち切るように無言で穴を埋め戻していく。

掘り起こしたときのようにスコップではなく、手でひとすくいずつ土をかけていると、その気はないのに色んな思い出が脳裏をよぎっては消えていく。

考えてみれば、何だかんだでナスター（達）とは十年近く一緒に過ごしたことになる。

それは未来永劫――恐らくは滅ぼされるまで――生き続けなければならぬ自分の長いときの中で換算すると、瞬きするほどの間ではあった。

けれど、決してそんな一瞬で片付けられるようなものではないことを、ブレイズ自身が一番良く知っている。

「楽しかったぜ」

それなりに……。

満月の、照らされるもの全てに影さえ落とさせる明かりの下で、一人影を持たないブレイズは口の端を笑みの形に引き上げた。

「……もう嫌になっちゃう！」

フリフリヒラヒラがふんだんに縫い付けられた、中世ヨーロッパのお人形さん風ドレスに身を包んだパティスは、桜色の形良い唇を目一杯尖らせてスカートのすそを持ち上げた。

「動きにくいと思ったらありやしない！ あの女^{ひと}つてばあたしのことを着せ替え人形か何かと勘違いしてるに違いないのよ！」

身を包んだ、というのは身を包まれた、に訂正したほうがよさそうだ。

黙っていれば相当可憐な少女なのに、その整った口からは先ほどから悪態ばかりがつむぎだされている。

肩口で切りそろえられたちよつと癖のある茶毛は、少し猫毛でふわふわとした印象だ。

しかし理知的な光に満ちた大きなブラウンの瞳が、やわらかい髪の影響を払拭して余りある。

年のころは十二、三歳と思われる少女だが、雰囲気だけでプラス五歳は軽く稼げそうな、そんな女の子。

「パパったらどうしてあんな女と結婚なんて言い出したのかしら！」
パティスは幼いころに母を亡くしている。

だから今まで父と二人、仲良く支え合いながらつつましく暮らしてきたのだ。

学者、なんてクソ真面目な仕事をしている父は、パティスが付いていなければきつと一週間だって生きていられないと思っていた。

研究のこと以外は何にもできない、ぼんやりのほほんな父が心配で、自分は年の割にしっかりしてしまったのだ。

こうなったら一生面倒見てやろうじゃない！

そう思って頑張っていたのに、一ヶ月ほど前、父は若い女性を連れて帰ってきた。

「パティ、お父さん、彼女と結婚しようと思うんだ」

何の前触れもなくいきなり告げられた衝撃告白に耳を疑ったのも束の間、

「初めまして、パティスちゃん。私はマリーン。よろしくね。至らないところも沢山あると思うけど、これからは私のこと、本当のママだと思ってしっかり甘えてちょうだいね」

何をいきなり、という提案までされてしまったのだ。

初対面でママだと思えるわけないじゃない！ 頭、おかしいんじゃない！？

本当はそう言って即座に突っぱねてやりたかったけれど、大人のレディとしてそれはどうかと思った。だからとりあえず微笑み返しておいたのだ。

頭の悪そうな女一人ぐらい、追い出す手はいくらでもあると思うたから。

うんと手をかけて困らせて、こんな娘このいる家にはいられない！
そう思われればしめたもの。

パティスは思いつく限りの悪戯をマリーンにしてやったのだ。

それなのに――。

「パティスちゃんは本当に元気な子ね。私の小さいころにそっくりよ」

毎朝マリーンが使う鍋の中にカエルを入れてやったって、出かける直前に彼女の靴を隠してやったって、服を泥だらけにして洗濯物を増やしてやったって……何をしたってマリーンは笑って済ませてしまふのだ。

ネジが一本緩んでいるんじゃないかしら？

毎日思いつく限りの悪さをしてみせるのに、ちっとも響かないマリーンを相手にしていると、何だか自分がつっても子供になった気がして悔しくなった。

だから家出してやったのだ。

相手が家を出ないのなら、自分が出ればいい。

そう。そうすればきつと、今度こそマリーンを困らせてやること
ができる。

パパだって、私が家出するくらい悩んでいるんだって知ったら考
え直してくれるに違いないんだから。

「さて……考え無しに家を飛び出してきちゃったけどこれからどう
しようかしら」

ただ、飛び出しただけではすぐに連れ戻されてしまうのが目に見
えていた。

そんな間抜けな事態を避けたくて、日頃からコツコツ貯めていた
お金で電車を乗り継ぎ乗り継ぎこんな田舎町まで出てきてしまった
けれど……。

「全部交通費に当ててしまったのは浅はかだったわ」

できるだけ遠くへ。丸一日かけて移動したし、何度も乗り換えた
のでそう簡単には見つからないはずだ。

けれど食事や宿のことをすっかり失念していたのは我ながら情け
ない。

「お腹空いた……」

気が付けば、朝から何も口にしていなかった。

公園に行けば水ぐらい飲めるかも知れない。

年の割に理知的な頭でそう思い至ると、パティスは薄暗い夕闇の
中、大通りらしき道を町の中央目指して歩き出した。

大体町の構造なんてどこも似たようなものなのだ。

皆の憩いの場である公園を中心に道が放射線状に伸び、それ伝い
に町が広がっていく。

だから大通りを家の多いほうに向かって進んでいけば、大抵の場
合公園に行き着ける。

果たしてパティスの思惑通り、二十分も行かないうちに石畳が敷
き詰められた広場に突き当たった。

田舎の公園の割に整備されたそこは、真ん中に石造りの噴水があり、その周りを取り囲むようにこれまた石製のベンチが四つ置かれていた。

パティスが歩いてきた通りから噴水を挟んで真正面にある小道は、どうやらこんもり茂った森へと延びているらしい。

そこだけ余り整備されていないのか、道の両サイドから伸びた草がまるで行く手を阻むように絡まりあっていた。

何だか近づくとき迷子になってしまいそうだ。

その道だけ他のものとは明らかに様子が異なっていることに軽い違和感を覚えたけれど、はつきり言って今はそれどころではない。

とりあえずその道にだけは近寄るまい、と心に決めて散策を開始した。

「ポンプはどこかしら？」

噴水があるのだ。近くに地下水を汲み上げる井戸ポンプがあつてもおかしくない。

キョロキョロと辺りを見回すパティスに、しかしそれを見つけ出すことはできなかった。

公園にたどり着いたところまでは計画通りだったのに。

何だか面白くない。

夕闇の迫る公園にはまるつきり人影がなく、パティスは急に心細くなってきた。

年端の行かぬ女の子が一人で公園内をうろついていれば、普通誰か一人ぐらい大人が見咎めてくれてもよさそうなものだ。

けれど、この町の住人は何かに怯えたようにピツタリと家々の扉を閉ざし、パティスのことなど眼中にはないように静まり返っている。

一人ベンチに腰掛けてひざを抱えると、パティスはそのまま頭を突っ伏した。

そういえばこの町に来て、まだ一度も人とすれ違ってないけれど

……私はこの町に拒絶されているのかしら。

今まで考えないようにしていた模倣とした不安が一気にこみ上げてきて、ひざに顔をうずめたまま何だか泣きなくなってきた。

気丈に振舞ってはいるけれど、パティスは大人と呼ぶにはまだまだ未熟な少女なのだ。

世界から取り残されてしまったような孤独の中で、両の目にじんわりと涙が溜まってくる。それを誰にも見られたくなくて顔を上げることができず、そのままの状態で動けなくなってしまった。

どのくらいじっとしていただろう。

長旅の疲れもあってか、パティスはいつの間にか泣きながら眠りに落ちてしまった――。

「おい、ガキンちよ。んなトコで寝てつと風邪ひくぞ」

突然、上からの目線でものを言われてパティスはビクツと跳ね起きた。

泣いたせいで腫れぼったい感触を伝えるまぶたを気にしながら、ほんの少し顔を上向けると辺りはすっかり宵闇に包まれていた。

満月といくつかの街灯のお陰で真っ暗闇にはなっていないかったが、この薄暗さなら涙の跡にも気付かれずに済みそうだ。

ホッと胸を撫で下ろしながら今度はちゃんと顔を上げる。

果たして彼女の真ん前に、仁王立ちで声の主が立っていた。

全身黒ずくめのその男は、瞳の色だけが最高級ルビーのようなピジョンブラッド。

その深い赤に吸い込まれそうな錯覚に陥り、パティスは思わずベシチから立ち上がった。

そうしてみても、パティスの身長は依然男の胸辺りまでしかない。深紅の瞳はまともに見つめると何故か危険な気がしたけれど、だからといって目をそらしては負けになつてしまいそうで嫌だった。

それで、わざと二、三步距離を開けてから、男の視線を押し戻すように睨み付けて言つてやったのだ。

「私はガキなんかじゃないわつと。」

「ふう〜ん？　こんな夜に一人公園で泣きべそかいてたくせにガキじゃねえのか」

そのセリフにハツとして目元に手を当てる。

「だ、誰が泣いてなんか……っ！」

「目の周り、真っ赤だぜ？　顔、洗ったほうがいいんじゃないか？」
鼻でふふん……と笑われた気がして、パティスの顔が怒りで紅潮する。

「……み、水なんてどこにもないじゃないっ！」

八つ当たりだと分かっていたけれど、人がいたという安心感と、男の不遜な態度に、ここへ来てからの不満が一気に爆発してしまう。「はあっ？」

途端、男に素っ頓狂な声を上げられて、氣勢を削がれてしまった。「え？」

思わず漏れた疑問符に、男は今度こそはつきりと嘲笑を浮かべて噴水を指差す。

「ひよっとしてお前の目は節穴か？」

つまりは噴水で顔を洗えばいいだろ、と言いたいらしい。

「あんた、馬鹿じゃないの！？ レディにそんなこと言うだなんてどうかしてるわ！」

男のセリフの意味に気付いたパティスが怒りに任せてそう言うと、男はいよいよ堪えきれなくなったように爆笑を始める。

何だかこれ以上怒るのが馬鹿らしくなってしまっほどう笑いまくられたので、パティスは逆に冷静になった。

男が笑い終えるのを待つてから、

「私はパティス。あなたは？」

とりあえず名乗ってみた。

考えてみれば、自己紹介も済ませていないのに話を続けるのは礼儀に反している。

パティスの問いかけに、男は目じりに涙を浮かべながら「ブレイズ」と応えた。

「ブレイズさん。もう一度伺うわ。この辺りに綺麗なお水はないのかしら？」

殊更「綺麗な」のところを強調してそう問いかけると

「ま、ないこともないが……」

何やら煮え切らない答えが返ってきた。

「案内してくださらない？ 私、喉がカラカラなの」

本当はお腹もペコペコだけど……。

そう思った途端、お腹の虫が盛大な音をたててグーっとな満を漏らす。

「はいはい。お姫様はついでに食いもんも欲しいわけね」

したり顔でニヤリと笑うブレイズに、パティスは顔を真っ赤にしてうつむいた。

「ついて来な」

それだけ言うと、ブレイズはさつきびすを返して歩き出した。その後を慌てて追いながら、パティスは一瞬躊躇する。

彼が目指した先は、さつきパティスが近付くまいと思った、草ぼうぼうのあの道だったからだ。

（私、このままついて行っても大丈夫なのかしら？）

考えてみれば人気のない田舎町で見知らぬ男と二人きり。満月とはいえ、夜のこと。小道に入れば街灯の明かりは届かなくなり、どことなく薄暗くなってくる。ましてやこの道は他のそのように開けていないのだ。

ブレイズの後ろについて歩いているからか、先ほど一人で見たときみたいに草が絡まりあって通行の妨げになっているように思えない。それどころか、むしろ草が避けてくれているような錯覚すら受ける。

しかし、歩を進めるにつれ、両サイドに徐々に増えてくる黒々とした木立の影が濃くなっていく様には、さすがに怖くなった。

何も言わず黙々とパティスを先導するブレイズの背中も、全身黒ずくめのせいで、油断すれば闇にまぎれて見失ってしまいそうだ。

（怖い……）

そう思うと何もかもが怪しく見えてきた。

慌てて引き返そうと後ろを振り返ると、今通って押しのけたばかりのはずの草が、元通り道をふさいでいる。

（嘘……）

そこをブレイズから離れて一人逆流するのは何だかとっても無謀に思えた。

もはやパティスは男からはぐれないよう、前進するしか道がない。でもそこでふと思に至る。

（もしかして彼、私の歩調に合わせてくれる？）

二十センチ以上の身長差は、当然足の長さにも影響する。

ブレイズがいつも通りのペースで歩いたとしたら、きっとパティスは何度も小走りしなければついていけなかっただろう。

ましてや不安の余り、後ろを振り返ったり周囲をキョロキョロ見回しながら歩いていたのだ。

置いていかれていたとしても、不思議ではなかった。

どうやらブレイズ、何も言わずともその程度には気を遣ってくれているらしい。

そんな彼に、パティスは少し警戒心を緩めた。

しかし――。ならば逆にどうして？と思うことも頭をもたげてくるのだ。

（この人、こんな時間に私が一人で外にいたこと、不思議に思わないのかしら）

聞かれたら聞かれたで「貴方には関係ないことよ」と即答してしまっただろうに、聞かれないでいるのは居心地が悪いことに思えた。

「ねえ」

とうとう沈黙に耐えかねて呼びかけると、男は振り返りもせず「何だ？」と問ってくる。

「ブレイズさんは私みたいな幼気いたいけな少女がどうして夜に一人でいたか、とか気にならないわけ？」

「幼気……って。お前、それ、自分で言っただけで恥ずかしくねえのか？」

質問とは違った箇所に反応するブレイズに、恥ずかしくないわよ！と吐き捨ててから、肝心な部分への答えを待つ。

「お前さ、俺にそれを聞いて欲しいわけ？」

「……？」

一瞬ブレイズの言った言葉の真意をはかりかね、きょとんとしてしまうパティス。

そんな彼女を、歩みを止めて振り返るとブレイズはあからさまに溜め息をついて見せた。

「だからガキだつちゅーんだよ」

フンツと鼻で嘲笑^{わら}う。

小馬鹿にしたようなその態度に、パティスは先ほどの不安も忘れて激昂した。

「何でそうなるのよ！」

パティスのその様子に、ブレイズは面倒臭そうに「やれやれ」とつぶやいてから、ひたと彼女を見据えた。

「お前が聞いて欲しいってんなら話しゃあいい。聞いてやるよ。俺は大人だからな。けど本人が話したくねえもんはイチイチ聞いたりしねえよ。無理矢理聞き出したって人間は嘘をつくしな。んなもん聞いたって時間の無駄だ。俺は無駄は好きじゃねえ。それだけのことだ」

だから好きにしる。

つまりはそういうこと。

年の割にしっかりしていると自負していただけに、初対面の——しかもかなり不躰な——男に子ども扱いされたことが悔しくて、唇を噛み締めてうつむくパティス。

「——で？」

そんな自分のあごへブレイズの片手が無造作に伸び、伏せていた顔を上向かされる。余りに無遠慮なその態度に文句の一つでも言うてやろうと彼を睨み付けたら深紅の瞳と視線がぶつかってしまった。その瞳に見つめられると、何故か蛇に睨まれたカエルよろしく動けなくなる。

薄暗くて今までは気付かなかったけれど、近くで見ると黒ずくめのこの男はとても整った顔をしていた。

ピジョンブラッドの宝玉がおさまった切れ長の目。それを縁取るまつげは思いのほか長く、鼻梁もスツと通っていた。象牙色の、どこか人間離れた美しさを放つ肌はまるでビスクドールのような。

年のころは二十代後半ぐらいだろうか。
見下ろされることは不快だったはずなのに、無意識のうちにそん

な彼に見とれてしまっていた。

「話したいからきつかけを作ったんだろ？ お前は何故公園で泣いてたんだ？ 聞いてやるから話せ」

ブレイズの顔にうつとりと心奪われたパティスの頭を現実引き戻したのは、皮肉にも当の本人から発せられた言葉だった。

限りなく外見に不釣り合いな口汚さに、パティスは我知らず溜め息を漏らす。

一瞬でもこんな奴を素敵だと感じてしまったなんて物凄く不覚だ。
(口さえ開かなければかなりの色男なのに)

脳裏に浮かんだその言葉は、悔しいので口には出さずにおいた。

「……今は言いたくないっ！」

かろうじてそれだけ吐き捨てると、パティスはあごにかけられたブレイズの手を、顔を軽くひねることで振り解いた。

聞いてもらいたくてきつかけを作ったというブレイズの言葉は、多分間違っていない。

だから自分でも今の態度は物凄くワガママだったと認める。

でも、こんな風に聞かれて「はい、実は」と話せるほど無神経にはなれなかった。

「……そうか」

ブレイズから小言の一つぐらい降ってくるかと思っていたのに、あっさりきびすを返されてしまつて驚く。

「行くぞ」

自分の思いとは裏腹に、何も言われず背中を向けられたことに、パティスは何故か寂しさを覚える。

(もう少し追求してくれてもいいのに……)

ふとそう思ってから、自分がひどく子供じみた考えを抱いたことに苦笑した。

「着いたぞ」

ブレイズの声に視線をめぐらせると、鬱蒼とした森の中、まるでそだけ切り取られたように野原になっていた。

「すごーい！」

今まで通ってきた道と違い、木々の枝に阻まれることなく柔らかな月光が降り注いでいる。

その光景に、思わず感嘆の声を上げて駆け出すパティス。ここなら、少々ブレイズから離れても大丈夫だろう。視界をさえぎるものもないので彼を見失うこともなさそうだ。

野原の真ん中まで走って立ち止まると、緑の匂いを胸一杯吸い込んで、清々しい気持ちで夜空を見上げる。空では、まん丸の月がちようど中天に差し掛かったところだった。

「お、おい！ 足元、無闇に踏んづけるんじゃないぞ！」

そんな彼女を追いながら、少し慌てた声音でブレイズが言う。

「足元？」

パティスの足元にはごくごく短い、彼女自身の影が落ちていた。

その周りに広がるのは鮮やかな天然の植物絨毯。

月光に照らされて、色彩まではつきりと見て取れる野原には、緑の葉っぱに混じって瑞々しい赤が見え隠れしている。

よく目を凝らしてみると、それは野原一面に実った野イチゴだった。

「食っていいぞ」

その実を見つめて瞳を輝かせるパティスに、苦笑交じりでブレイズが許可を出す。

「お前が望んでるようなお綺麗な水かは分からねえが、あっちに行きや小川もある。もっとも——」

彼の指差すほうを見やれば、まばらに立つ木々の間を縫うように

して、きらきらと月光を跳ね返す、細い帯状の流れが見えた。

「有難う！」

ブレイズが、まだ何やら続けているようだったが、何だかんだで三十分以上森の中を歩く羽目になってしまったのだ。

夜とはいえ、すっかり歩けば少し汗ばむくらいにはなってきた。初夏のこと。

ペチコートやら何やら色々重ね着しまくっているパティスは、尚のこと暑かった。

女の子らしく、ちよつとでも早く顔だけでも洗ってサッパリしたい。そんな気持ちが行先してしまったのは仕方なかるう。それで、ブレイズの声を断ち切るように礼を述べて、走り出してしまったのだ。

ハチドリのようにせかせかと動き回るパティスに、ブレイズは少々遅れ気味だ。

「こ、こら！」

人の話を最後まで聞け、と言いたいのか、後ろのほうで叫ぶ声が聞こえたが、パティスは聞こえない振りを決め込んだ。

スルリ……

そのとき視界の端を何か黒っぽいものが掠めた気がしてパティスは思わず足を止める。

気のせい……ではなかった。下生えの中、茂みを掻き分けながら、何かがモソモソと動いている。

「……？」

よく見える位置に近付こうとしたら、追いついたブレイズに腕を捕まれて後ろに引き戻された。

余りに乱暴なその所業に「いきなり何すんのよ！」と文句を言おうとしたら、とっても怖い顔をした彼と目が合った。

「お前な、人の話は最後まで聞けよ！」

そこまで言っつて、まだ少し草を揺らしている茂みへ視線を向けると、無造作にそこへ手をつ込む。

引き戻された彼の手に持たれているのは、一本の紐——ではなく蛇——だった。

「ッ……！ キャー……アアアッ！」

いきなり眼前に突きつけられた長ものに、パティスはあらん限りの絶叫を浴びせかける。

「……だあーっ、もう、うるせえ！」

一向に止みそうにない悲鳴に、ブレイズが手にした蛇を無造作に放り投げたのも致し方あるまい。

「ほら、もう遠くにやったぞ。いい加減落ち着け！」
軽く頬をはたかれて、正気に戻る。

「ひどい！ いきなり蛇を見せるなんて！」

涙のにじむ目で、抗議の言葉を浴びせると、
「お前が最後まで人の話を聞かねえのが悪い！」
逆に睨み返されてしまった。

もしかしたらブレイズ、物凄く怒っているのかも。
ブレイズに、骨の芯まで凍りついてしまいそうな冷たい視線を向けられると、造作が整っているだけに迫力満点だ。

「……ご、ごめんなさい」

しゅんとして謝るパティスに、

「ありや、毒蛇なんだよ……っ」

ゾツとする言葉を吐き捨てて、

「……俺のほうも言う順序が間違ってた。すまん」

パティスの頭をぐしゃつと撫でて、謝罪の言葉を述べる。

余りに意外なその言動に、パティスは思わず瞳を見開いて彼を凝視した。

「……ンだよ？」

途端元通りの不機嫌そうな口調に戻ったブレイズに、そっぽを向かれてしまう。そんな彼を見て、パティスは無意識のうちに微笑んだ。

野イチゴはほんの少し薄日が当たる、水気の多い場所に自生する。そういうところは冷んやりしているので蛇も好むのだとブレイズは言う。

そう聞かされたパティスは、もう蛇はうんざりだと彼の背後にしがみついた。ブレイズはそんな彼女に苦笑を浮かべはしたが、特に文句を言うわけでなく、先導してくれる。

毒蛇だと言ったくせに、彼自身はいつかな意に介した風もなく足で直接ガサガサと草を掻き分けながら進む。

その様に内心おっかなびつくりのパティスである。

そういえばブレイズ、先ほども臆した様子なく草むらに手を突っ込んで蛇を掴み上げて見せたが、あのときもし噛まれていたらどうなっていたんだろう。考えただけでゾツとした。

見目麗しい外見に似合わない、粗野な言動が多いブレイズの背中を見つめながら、得体の知れない相手だなと感じるのと同時に、頼もしいなとも思ってしまう。

そんなゴチャ混ぜの気持ちを払拭するように、パティスは冷水で念入りに手と顔を洗ってさっぱりした。そんな彼女に、どこから取り出したのかブレイズがハンカチを投げて超越す。

「有難う」

パティスもハンカチを持っていなかったわけではないが、せっかく差し出してくれたものを無下に断るのも悪い気がして有難く使わせてもらう。

口は悪いが案外優しいこの男に、パティスは少しずつ心惹かれるものを感じ始めていた。

とはいえ、そうだとバレルのは何となく悔しいので、態度には現すまいと決意していたりもするのだが――。

淡い月光が降り注ぐ草むらに、ブレイズと二人並んで腰を下ろす。しばらくそうして夜気に当たっていたら、火照った身体がだんだん冷えてきた。

ただ座っているには、初夏の夜はまだまだ寒い。

ここまでの道すがら汗をかいたのがいけなかったのか、ブルツと震えてほんのちよっぴり縮こまったパティスに、ブレイズが無言で自分の上着を着せかける。

その感触に驚いて彼を見やると、

「風邪ひかれちゃ迷惑だ」

そっぽを向いてそう言われた。まったく素直じゃない。

そんなブレイズを「可愛いな」なんて思ってしまったて図らず笑みがこぼれるパティス。

でも、怒られそうなので今思ったことは内緒だ。

そんな自分を不審に思っただのか、気が付くとブレイズにじつと見つめられていた。

「な、何……？」

思っていることをすべて見透かされてしまいそうな彼の瞳に、パティスはドキドキしてしまう。

「腹、減ってたんだろ？ 食わねえのか？」

いつの間に摘んだのか、片手にこんもりと野イチゴを載せてブレイズが問うてくる。

他意はなさそうな彼の声音に、「何だ、そっちか……」と安堵した途端、お腹の虫が思い出したように騒ぎ出した。

「いただきます」

行儀よくそう告げて彼の手から野イチゴを数個もらって頬張ると、甘酸っぱさが口の中一杯に広がった――。

無言で野イチゴを食べ続け、お腹も少し落ち着きを取り戻してきたころ。パティスは思い切って気になっていたことを聞いてみることにした。

「ブレイズさんはこの辺に住んでるの？」

滅多に人が通っていなさそうなあの小道をわざわざ選んで入ったのだ。きっと彼はその先の住人に違いない。

そう当たりをつけて問いかけると、ブレイズは一瞬困ったように眉根を寄せ、そうして諦めたような溜め息とともにうなずいた。

「ブレイズでいい。——お前、案外頭切れるのな」

案外、という余計な部分はこの際聞かなかったことにする。パティスには、どうしてこの青年が困惑したような表情を浮かべたのかというほうが重要に思えたからだ。

「もしかして……聞いちゃまずかった？」

「あ、いや、んなわけじゃ……」

ますます煮え切らないブレイズの態度に、野イチゴを運ぶ手が止まる。

そつえば彼、さつきからひとつも実を口にしていなかった。

「嫌いななの？」

「……？」

いきなり話題を変えてしまったので、ブレイズにはそれが何を指しての言葉だったのか伝わらなかったらしい。

「野イチゴ」

彼が手に載せた実を指差しながら言う。

「あ、いや、そういうわけじゃ……」

「じゃあ、お腹が空いてない……？」

「いや、どっちかつちゅーと減ってるような……」

またもや煮え切らない返答。

先程までの小憎たらしい齒に衣着せぬ物言いとは明らかに違っているその態度に、パティスは彼が自分のことを聞かれるのが好きではないのかも、と思い至る。

「ごめんなさい、私ったら。聞かれたくないこと聞くのは大人じゃなかったね」

ペロリと舌を出して微笑むと、ひどく真剣な顔で見つめられた。

「……な、何——？」

ただ目が合ったただけなのに心臓が壊れそうなくらいドキドキしてしまう。

それを悟られたくなくてブレイズから視線をそらしてうつむくと、彼の手があごにかかった。そのまま顔を上向けられて、またもや目が合ってしまう。

パティスの眼前にあるのは吸い込まれそうなピジョンブラッドの双眸。

「俺が怖いかな？」

そのまま見つめ続けていたらどうにかなってしまいそうだと思う視線をそらすと、どこか悲しそうな声で問いかけられた。

「え……？」

怖かったわけではない。

ただ、そのまま見つめているとブレイズにときめきを気付かれてしまいそうで恥ずかしかっただけ。それを隠したかっただけのパティスは、ブレイズの言葉の意味を掴み損ねてきよんとする。

「……どうして？」

かろうじてそう問い返すと、彼はパティスの顔にかけた手を離して何も言わずに立ち上がった。

座った状態でブレイズを見上げる格好になってしまったパティスは、月光を背にして自分を見下ろす彼が、とても綺麗だと思った。そうして同時に凄く寂しそうにも思えたのだ。

「ブレイズ？」

呼びかけると、彼はパティスから一步遠ざかって己の足元を指し示した。

「？」

彼が何をしたいのか分からず戸惑うパティスに、今度は月を指差してみせる。

導かれるままにその両方を見たパティスは、彼の足元にあるべきはずのものが無いことに気が付いた。

「……影……？」

パティスの口をついてでた言葉に、ブレイズは自分の言いたいことが伝わったことを知ったらしい。

自嘲気味に口の端を歪めると、

「俺は人間じゃない。ヴァンパイアだ」

パティスにとってもっとも理解し難い一言を口にした。

ヴァンパイア。吸血鬼。人外の者。異形。
色んな言葉が頭の中をグルグル回る。

人間ではない。

そう言われてしまえば納得できることがいくつかあった。

薄暗がりのなかで涙の後を見抜いた理由も、生い茂る草が彼にだけは道を開けた不思議も、桁外れの美貌も、毒蛇をものもしない態度も、野イチゴを口に入れなかったことも――。そう、何もかもみんな。

どれも些細なことの寄せ集めだったけれど、そう説明されれば納得のいくことばかりだった。

否定したくてもできない現実を突きつけられた気がして、パティスは動けなくなる。

大きな目を見開いて固まってしまった彼女にも、ブレイズが小さな吐息を漏らしたのが分かった。

「――送って行こう」

それだけ言って背中を向けたブレイズが、何だかとても悲しそう

で。
泣いている、ということはないだろうが、振り返った彼がもしも涙を流していたとしても、パティスはきつと違和感を覚えなかっただろう。

話し相手に恵まれず、世間から取り残されたような孤独感を感じることがどれだけ辛いかは、先ほど自分自身も経験済みだ。

そんな時間ときを、この眼前の青年はどんなに長いこと一人で過ごしてきたのだろうか。

さつき公園で寂しくなってひざを抱えて泣いていたパティスに手を差し伸べてくれたのは、紛れもなくその彼なのだ。

もしかしたらパティスの姿が己と重なって見えたのかも知れない。

「待つて！」

そう考えたら、彼がヴァンパイアだとかそういうことはどうでも良くなった。このまま別れてはいけない、と思った。

強い焦燥感に駆られて呼び止めると、立ち止まったブレイズが無言で振り返る。

「……」

紅玉の双眸が所在なげにこちらを見つめ返すのへ、

「私、家出してきたの。だから……」

送っていくと言われても戻ることはできないのだと言外に含ませる。

「お前、俺の話聞いてなかったのか？」

「聞いていたわ」

「だったら……！」

何を言っても不安のためか自分を遠ざけようとするブレイズに、パティスは少しイライラする。まったくもって素直じゃない。

「私を襲う気なの？」

絶対そんなことはしないと買ったからこそ言えたセリフ。

挑むようなパティスの目に、ブレイズが驚いたように息を呑む。

「……バ、バカかつ！？俺は貧乳のガキに興味はねえ！」

どうせ襲うのならグラマーな美女にするといい切るブレイズに、パティスは軽いショックを受けた。

自分の、膨らみかけの未発達な薄い胸を見て、それからブレイズへと視線を戻す。

「最ッ低ッ……！」

パティスの怒声とともに、小気味良い音が夜気のなかに響いた。

「悪かったって。機嫌直せよ」

つん、とそっぽを向いてしまったパティスに、この通り！といって手を合わせるブレイズ。

パティスの平手打ちはブレイズの左頬に小さな赤い手形を残して

いた。じわじわと熱を帯びた痛みが伝わっているだろうに、それについては一切言及しない。

きつと悪かったと思っっているのは本心なのだろう。

しかし、そのぐらいでは腹の虫がおさまらないパティス。先ほどからそつぽを向いたままブレイズを見ようともしなかった。

「なあ、どうしたら許してくれる？」

女は怒らせるとしつこいということを経験から知っているのか、ただひたすらに謝り続けるブレイズに、パティスも段々意地を張っているのが馬鹿らしくなってきた。

でも、折角の申し出を反故にするのはもったいない。

何かしてもらえること――。

そこまで考えて名案を思いついたパティスは、くるりと向きを変えてブレイズに微笑んだ。

「今晚泊めてくれるなら考えても良いわ」

若い男の家に一夜の宿を請うだなんて我ながら大胆発言だな、と思いはする。しかし、ブレイズの家が見られて一石二鳥だという気持ちのほうに勝った。というより、多分彼のそばを離れたくないだけだ。

「どう？」

パティスのセリフに固まるブレイズに、畳み掛けるようにもう一度問いかける。

「……お前、それ、本気で言ってるのか？」

驚きを隠せないといった表情でそう言うブレイズに、「当然よ」と即答する。

その、取り付く島もない態度にあからさまに溜め息をついてみせるブレイズ。

「俺だつて本気で腹が減ったら何するか分かんねえんだぞ？」

脅しのようにそつつぶやくが、そんなことで引き下がるパティスではなかった。

「結構よ」

あつかんべ〜。

襲われるのは嫌だけど、襲うかもしれないぞ、と言われるのは何だか心地よかった。矛盾しているとは思うが、先ほどのように「ガキは趣味じゃない」とにべもなく拒絶されるより何倍も良い。きっとそれは、ブレイズに女性として認められたような気分になれたからだろう。

もとよりブレイズが渋ることは想定のうち。パティスは、引き下がってやるつもりなんて毛頭ないのだ。

実際、家出してきた手前、どんな顔をして家に戻ったらいいのかも分からなかったし、何より帰るための交通費がない。今すぐ電車に乗って、という行動が取れない以上、寢床の確保は最優先事項だ。とりあえず今夜一晚、安心して過ごせる場所が得られたなら、その後のことはまた後日考えればよい。

何より今夜はもう遅い。

きっとブレイズもそう思ったのだろう。

はあ、と諦めたように大きく溜め息をつくと、

「一晩だけだからな？」

そう念を押して彼女の提案を呑んだ。

野原の先に見える、黒々とした樹影の連なり。

パティスはそこを森の始まりだと思っていた。道なんてどこにもない、樹海のような深い森だ――。

そこへ迷い込んだなら戻れなくなると誰もが思うであろう、人を寄せ付けない鬱蒼とした森。

でも、ブレイズはそのなかを迷うことなく進んでいく。

彼には目に見えない道が見えているのだろうか。その歩みには少しも躊躇^{ためら}う様子は見られない。

先ほど公園から野イチゴがある野原まで歩いたときとは違い、彼の服のどこかを握っておくように言われたパティス。手をつないで欲しくて「掴むところがない」とこねたら着せ掛けられていた上着を取り上げられた。「どうせ今から歩くんだし、動けば寒さも感じなくなるだろう」と言われて。

結局ブレイズの上着のすそをしつかりと握らされる羽目になったパティスは、不満顔で彼の後をついて行く。

どこか一部分でもつながっていると指示するということは、やはり彼からはぐれるとこの森は人一人ぐらい簡単に飲み込んでしまうということだろうか。

「結界があるからな」

まるでパティスの考えを読み取ったようにブレイズが言う。

「結界？」

「ああ」

陽光にさらされれば灰になってしまう吸血鬼という身体は、人間が思う以上に不便なのだ。ブレイズは溜め息をついた。

不死と引き換えに様々な制約を抱えているブレイズは、考え方によつてはとても弱い存在なのだ。

昼夜を問うことなく外を闊歩できる人間に対し、ヴァンパイアは

夜にしか外出することができない。加えて流水を嫌うという性質もあるため雨が降れば——それが例え夜であろうとも——出歩くことが困難になる。

陽光、聖水、十字架、流水、にんにく。パティスにとっては何ともないものも、ブレイズには命取りになるのだ。

好物は活力ある人間の血液。できれば美しい異性希望。

どんなに空腹だったとしても、襲った相手の致死量までその血を吸い尽くしてしまうようなことは決してしないのだと語るブレイズを見ながらパティスは思う。果たしてそれを、襲われる側の人間が信じるかしら？と。答えは否、だろう。捕食者と被捕食者という立場で見れば、人間はヴァンパイアを忌み嫌って当然なのだから。

パティスだって、いくら相手がブレイズでも血を吸われるのはごめんこうむりたい。

「俺、この界限じゃあ結構嫌われてるわけよ。だから油断してたら寝首をかけられる可能性だってあるだろ。眠ってる間に襲われたらどうしようもねえからな」

だから結界が不可欠なのだとブレイズは言う。

その言葉を聞いて、パティスはこの町の家々が夕闇前から扉をぴたりと閉ざしていた理由を垣間見た気がした。

もしかしたらよそ者のパティスが外を出歩いているのを見て「危ない」と思った者もいたかも知れない。でも所詮面識のない女の子。その子が犠牲になってくれて、自分たちが安全ならそれで良いと考えたのかも。

何だかそう考えると、ブレイズがとっても気の毒に思えてしまったパティスである。

そういう考え方の人間がそろったところなら、ブレイズがどんなに友好的なヴァンパイア——これは変な言い回しだと自分でも思う——だったとしても聞く耳は持たなかっただろう。

きつと、彼は今まで異形と言うだけで阻害されていたに違いない。何せパティスにしても、今はブレイズのことをある程度知ってい

るからこそそう思えるのだと自認しているくらいなのだから。彼と知り合う機会がなかったなら、きっと自分もこの町の人々と同じような反応をしていたはずだ。だからこの町の人たちを責めるのはおかしいよね。そう思い直して苦笑する。

「ブレイズはいつからヴァンパイアなの？」

知らずそう問うてしまったのは、彼の中の孤独の長さを測ろうとしたためだろうか。

「生まれたときから」

それはどういう意味だろう。

パティスは、吸血鬼というのはそれに襲われた者になるのだと思っていた。

だから生まれつきのヴァンパイアだなんて、今一ピンとこない。

（私の認識って間違っているの？）

きょんととして立ち止まってしまったパティスに気付いたブレイズが

「後天的な吸血鬼ってえのは滅多にいなえと思ったほうがいいぞ。少なくとも俺は一人しか会ったことがない」

そう断言する。

「じゃあ、ブレイズに血を吸われても……」

「それで仲間が増やせるんなら苦労しねえな」

どこか寂しそうな表情かおをして苦笑するブレイズを見て、それもそうだなとパティスは思う。そんなことができたなら、彼が孤独にしている理由なんて何一つないのだから。

「ご家族は？」

「……やられた」

あっけらかんと一言で片してしまったけれど、それはブレイズにとって数少ない理解者を失くした日であり、また同時に孤独の始まりになった日でもあったはずだ。

「ごめんなさい、私……っ」

パティスはブレイズの雰囲気から、彼に両親はおるか、家族と呼べる存在——ひいては同族と呼べる存在すら——いないだろうことを承知していた。それなのに確認せずにおられなかったのは、ブレイズが一人ぼっちだと知ることによって自分が唯一の理解者なののだと思いたかったからに他ならない。

（私って何て嫌な奴なの……）

謝って、しゅんとしてしまったパティスの頭をブレイズがぐしゃぐしゃと撫でる。

「ガキが大人みたく色んなこと気にしすぎるなよ」

子供は子供らしくもつと無遠慮でいいのだと、自分の非礼を責めようともしないブレイズに、パティスはますます胸が苦しくなる。

でも口を開けば憎まれ口を言ってしまうそうで。何としてもそれだけは避けたかった。

結局パティスはしばらくの間、何も言えずに彼の上着のすそを握りしめているのでやっとだった——。

「それ」が突然目の前に現れたように感じられたのは、やはり錯覚だろうか。それともこれも「結界」のなせる業なのだろうか。

古城のような外観の、威風堂々たる建物を見上げてパティスは思わず息を呑む。

こんなものが建っていたら絶対に遠くからでもその一部ぐらい見えそうなもののに。

いよいよその眼前に立つまで、パティスはその存在に気付けなかったのだ。

先ほど彼に酷いことを言ってしまったと黙り込んだパティスの頭を、ブレイズは何も言わずに撫でてくれた。

ヴァンパイアにぬくもりはないのだと思っていたパティスは、それが思い違いだったことを知る。

ブレイズの手はとても温かったから。

そのぬくもりはパティスと何ら変わらない——いや、むしろパティスより温かいかもしれない——くらいで、彼の手を頭に感じるのはとても心地よかった。

「俺が良いって言うてんだからお前ももう気にすんな」

耳に吐息がかかるほどの距離で発せられたブレイズの静かな低い声。それは甘い音色を伴ってパティスの耳朶を打つ。

その声にパティスは耳まで真っ赤になって身じろぎもできなくなった。

その反動なのか、今までやっとの思いで堪えていた涙が、ポロポロと堰を切って溢れ出す。

「……ごめ、んな、さい……」

人前でこんな風に泣いたのなんてもう何年ぶりだろう。

母親が亡くなって以来、初めて素の自分になれたと思った。

年相応の、幼い顔をして泣きじゃくるパティスを、ブレイズが静かにそっと抱き締める。

「泣くな。俺が泣かせたみたいだろ？」

背中を軽くぽんぽん、と叩きながら発せられるセリフも、いつもと違ってどこかとても優しい。

泣くな、とは言いつけれど彼はパティスを無理に泣き止ませようとはしなかった。

パティスが自然に落ち着くまで、静かに待っていてくれた。

どのくらいそうしていただろう。

思い切り泣いたパティスは、涙と一緒に今まで背負っていた「大人にならなければ」という気負いをすべて洗い流せたような、どこかとても軽い気持ちになれた。

「……有難う。もう大丈夫」

そう言つてブレイズからそっと離れると

「パティス、手……」

ブレイズがいつも通りのどこかぶっきらぼうな口調で手を差し伸べてきた。

きつと彼は、最初からパティスが自分と手をつなぎたがっていたことを知っていたのだ。知っていて気付かぬ振りをしていたのだらう。

それが急に手を差し出してくれたのは、きつと自分が素直になったことへのご褒美なのだ。

「……私の名前、初めてちゃんと呼んでくれたね」

パティスが、そんなブレイズの手を取りながら、まだ少し涙の乾き切らない顔を向けてはにかんでみせる。

その笑顔に照れたのか、それには何も答えずそっぽを向くブレイズ。しかし、パティスが載せた手をそっと握り返してくれたことで、パティスには彼が「お前の存在を認めたからだよ」と言ってくれているように思えた。

そこからの、彼と手をつないで歩いた数分間は、パティスにとっ

て至福の時間となった。

手から伝わる温もりが、彼が異形であることを忘れさせてくれたからかもしれない。

そうして今この建物の前に立ち、パティスは失念しかけていたブレイズと自分との違いを思い出したのだった――。

「凄いお屋敷……」

率直な感想を漏らすと、横に居るブレイズが苦笑するのが分かった。

ロマネスク様式の風情漂ったたずまい。

石を積み上げて作られた重々しい外壁と、とんがった屋根。開口部はほとんど見られず、窓も小さくて狭い。

月光をバックにそびえるそれは、何だかパツと見、砦か要塞のようだとパティスは思った。

ここについた時点で、いつの間にかつないでいた手は解かれている。

自分がぼんやり建物に見入っている間に、ブレイズは一人で先に行っていた。

「入らないのか」

その声にハツと気がつく、ブレイズが重厚な扉に手をかけ、振り返っていた。

「は、入る！」

勿論そのつもりできたのだから。

あわてて彼の後を追って石造りの階段を駆け上がると、パティスはその建物の中に足を踏み入れた。

重々しい音をたてて背後の扉が閉まる。

観音開きの厚い木製扉は、中からかんぬきを掛けて施錠する仕組みになっていた。

パティスが中に入るのを待っていたブレイズは、彼女が追い着くのと同時にきびすを返して廊下の奥へと歩き出す。

扉に施錠しようという動きがない彼に、街中育ちのパティスはちよつぷり驚いた。「閉めないの？」と聞いたら、「必要ないからな」と即答されてきよんとする。そんなパティスへ、ブレイズが苦笑交じりに言い放つ。

「結界があつただろ？」

そういえばそうだった。

パティスはブレイズ無しではこの城にたどり着くことができなかったのだ。自分がたどり着けないということは、他の者にしだって同じということだ。

確かにかんぬきの必要はなさそうだ。

外観と変わらず、中も石質の冷たさが漂う建物の中、明かりといえは等間隔で壁面に取り付けられた燭台に灯るほのかな炎の揺らめきのみ。

入ってすぐのときは真つ暗だったのに、ブレイズが片手を軽く一振りすると、それらに一斉に火が灯った。

その様は壮観だったけれど、やっぱりブレイズは自分とは違うんだな、と思い知らされるきっかけにもなってしまう、パティスは少し悲しくなる。

要塞然としているこの建物には窓も殆どないようだ。あってもノートを一冊置いた程度の小さな穴が所々にあるのみ。窓ガラスもはめられていない、ただの空洞のようなそこからは、月光の淡い光で

は——満月といえども——その恩恵を受けることが適わない。

しかも、窓という窓全ての雨戸が閉ざされていて、外から入ってくる明かりはその合わせ目の隙間から漏れる糸のように頼りない光のみなのだ。それで結局頼れるのは燭台の蝋燭の明かりだけだった。こんなところで一人、ブレイズはよく我慢できるな、とパティスは思う。

自分だったら雨戸を全て開け、燭台という燭台に明かりを灯していたって耐えられそうにない。

ここは普通の城と比べるとかなり小さめだが、それにしたって一人で過ごすには広すぎるようにも思えるし。

部屋数は軽く換算しても全部で二十以上はあるのではなかるうか。左右に伸びる、長い回廊の奥に広がる鬱々とした闇を見て、パティスは何となく身震いをする。

今いるエントランスホールは吹き抜けになっているのだが、屋敷全体が薄暗いため、見上げて上のはうはほとんど見えなかった。右手奥に見える螺旋階段は、まるで闇に向かって伸びているようだ。

外から見た印象では恐らく二階建てだと思うのだが、パティスの家よりはるかに高く感じられる天井には、これまた蝋燭を灯すタイプの豪華なシャンデリアの姿が伺える。

遠い高みにまるで消えかかった星が集まったように薄らぼんやりと浮かぶシャンデリアは、照明としての機能をあまり果たしていないように思われた。

屋内の、薄明かりに目が慣れてきたパティスは段々周囲の様子が分かるようになってくる。

それに伴い、キョロキョロと物珍しそうに辺りを見回し始めたパティスを、ブレイズはしばらくの間、何も言わずに待っていてくれたらしい。

「そろそろいいか？」

いつの間に手にしたのか、廊下の一角にあった燭台を捧げ持ち、

パティスより少し先の廊下に佇んだブレイズから、そんな声がかかる。

その声に、一気に頬に朱が差すパティス。

余りにも不躰に屋敷内を眺め回していた自分が恥ずかしい。

「ご、ごめんなさい」

消え入るような声で謝罪すると、ブレイズの元へと駆け寄った。

「どこへ向かっているの？」

てつきりすぐその螺旋階段を上がって応接室のようなところへ通されるのだろうと思っていたパティスは、そこを通り過ぎて更に奥へと進んでいくブレイズにそう問いかける。

「俺の部屋」

そのセリフに一瞬ドキツとする。

初対面なのにいきなり私室に行ってもいいものだろうか？

真っ赤になつてうつむくパティスに気付いたブレイズが、「しかし片付けてねえから」と言つて苦笑する。

ブレイズの前で大泣きをしてしまつてからというもの、彼の、自分へ対する態度が変わつてきたように感じるパティス。

きつと出会つてすぐの頃のブレイズなら「バカ。何期待してるんだよ？」と突っけんどんに言われていたはずだ。どこか角が取れたような印象のブレイズに、パティスは何だかソワソワする。

「あの……」と呼びかけてはみたものの、「ん？」と問い返されると何と切り出したらいよいものか分からなくて「何でもない」と返してしまう。

そういえば、ブレイズだけでなく、自分も変わった気がする。

相手に対するトゲが抜け落ちてしまったのは、何もブレイズだけではないのかも？

（お互いに素直になつてる？）

そうということなのかも知れない。

ブレイズの後を歩きながら、パティスはそう気付いて微笑した。

ブレイズが扉を開けた途端、部屋の中から勢いよく何かが飛び出てきた。それがたてる、バサバサという羽音（？）に驚いて、パティスは思わずブレイズの影に隠れる。

「こ、こら！ ディック！ 悪戯が過ぎるぞ！」

そんなパティスを背後にかばいながらブレイズがそれ——ディック？——を捕まえた。

彼に捕らえられてもなお、逃げようと必死でもがくディックとやらを、パティスはブレイズの肩越しに恐る恐る透かし見る。

「鳥？」

……に見えた。

左右の翼をばたつかせるその姿はパティスの知る中ではそう呼ばれるものだったから。

でもどう見てもおかしい。鳥にしては翼が何枚も重なりすぎた。それに余りにも綺麗な四角形だし。

「あゝ。すまん。これ、本なんだ」

申し訳なさそうに眉根を寄せて、ブレイズがそう教えてくれる。

両の手は、依然暴れまわる本を制するのにやっとで使えそうにない。

「本……？」

そんなものが羽ばたいたりするだろうか？

半信半疑でもう一度よく見ると、なるほど、それは紛れもなく一冊の本だった。

ハードカバーの分厚い翼と、その付近の頁数枚を、まるで鳥がそうするように動かしながら必死でもがいてはいるけれど。

表紙に書かれた文字からすると、どうやらそれは「辞書」らしい。

「え？ でも……何で？」

さっぱり意味が分からない。

余りに現実離れたことが起こると、感覚が麻痺してしまうらし

い。驚くほど冷静に現状を受け止めてしまえる自分に軽く驚きながら、パティスは淡々と疑問を口にした。

言いながらブレイズの手のモノにそつと触れると、「辞書」はまるで嫌々をするようにさらに激しくばたつく。

「こ、こら、挑発すんなよ」

怒られてしまった。しかしパティスが悪いのだろうか？

思わず条件反射で「ごめんなさい」とつぶやいてみたものの、何だか納得がいかない。

「ちよつと遊び心でな——」

「何をしたの？」

やつとのこととで「辞書」を閉じたブレイズを、その言葉とともに睨みつけると、「怖い顔するなよ」と苦笑された。

「……息、吹きかけたただけだ」

「え？ ……息？」

「そう」

その言葉に呼応するようにブレイズの手の中の「辞書」がまた暴れた。

「こら、ディック、そんなに暴れてると元の本に戻しちゃうぞ！」

ブレイズのその声に、ディックと呼ばれた辞書がピタリと動きを止める。

「ディック？」

パティスが聞き返すと、ブレイズはばつが悪そうに「ディクシ Dictionaryのディック」とつぶやいた。その返事に、パティスはなほどねと思うと同時に安直さを感じたことも禁じえない。

「ブレイズが息を吹きかけるとみんなそんな風になるの？」

至極まともな問いを投げかけるパティスに、ブレイズは「やろうと思えば」とうなずいた。

「やって見せて？」

百聞は一見にしかずだと思ってそう言ったら「こんなん、増やしたいのか？」と真顔で切り返された。

いや、それは困る。

慌てて首を横に振ると、ホツとしたようにブレイズが溜め息をついた。そこでふと思いついたように

「小さいもんならやってみてもいいぜ？　こんくらいまでなら暴れても抑えがきくからな」

ディックを手にしていない左手の親指と人差し指でコの字を作るブレイズに、パティスは「そんなに小さな本なんてあるの？」と問い返した。

「いや、本じゃなくて紙切れで」

本はこりこりみたいな口調でそう言うブレイズを横目に見ながら、パティスは良いことを思いついた。

「ね、ブレイズ、正方形の紙ある？」

につこり笑ってそう告げた。

ブレイズの自室から出て更に奥へと回廊を進むと、まもなくして行き止まりに突き当たった。彼の部屋は屋敷一階の西側最果てに位置していた。

行き止まったところでブレイズが床の石畳の一角に軽く触れると、触れた箇所があつという間に消え失せる。

床にポツカリと口を開いたその空洞の中には、地下へと続く螺旋階段が伸びていた。

その様に目を白黒させるパティスを置いて階段を降り始めるブレイズ。

四、五段降りたところで思い出したように振り返ると、動きが完全に止まってしまっているパティスに手を差し伸べた。

「来いよ」

そう言って笑うブレイズの足元は、深い闇に溶け込んだように同化して見える。少し怖かったけれど、彼が手をつないでくれるのなら大丈夫だと思えた。

そんなパティスの怯えを悟ってか、ブレイズは階段を降り始めて

もずっと手を握っていてくれた。

片手に燭台、片手にパティスの手で、両手は完全にふさがってしまっているブレイズ。

パティスにとつては自分の腰から下すら見えないような黑暗々（こくあんあん）たる闇も、ブレイズには何ら支障はないようだ。自分に合わせてゆっくりとした歩調で前進する彼の手をしっかりと握りしめながら、パティスはそんな風に思う。もしかしたら捧げ持つ灯火だって、彼一人なら必要ないのかもしれない。

下手をすればつないだ手すらあるのかないのか分からなくなってしまいそんな闇の中で、ブレイズの手のぬくもりと、頼りない炎の揺らめきだけがパティスの世界の総てだった。

「……どこまで続いているの？」

あと何段降りればこの階段は終焉を迎えるのだろうか。

不安になってそう問いかけると

「怖いかな？」

逆に聞き返された。

「……うん」

素直にそう告げると

「だよな。気付かなくて悪かったな」

見えなくてもブレイズが苦笑したのが気配で分かった。

と、同時にパティスの周りを取り囲むようにポツと炎が灯る。

「——っ!？」

今更声を上げて驚いたりはしないけれど、やっぱりブレイズは凄いな、と思う。そうして自分とは違うのだな、とも。

火の玉のようにフワフワと漂いながら浮かぶ無数の炎のお陰で自分の手足がはつきりと確認できるようになった。そして、手をつないだ先にいるブレイズの姿も。

それを見てホッとしたパティスは、「有難う」と礼を述べてにこりと笑う。

明るくなって見てみると、案外ゴールはすぐそこだった。

ブレイズに手を引かれて地下室に下りると、そこには所狭しと物が積まれていた。

「物置？」

思わずそうつぶやいてしまったのも無理はない。

「失礼な」

だから意外にもブレイズから憤慨したような声が返ってきて驚いてしまったパティスである。

「違うの？」

「つたり前だろ。ここは俺の寝室だ」

一瞬耳を疑った。

だってここにはベッドらしきものの姿はないし。それに、だとしたら上にあつたあの「自室」は何なのだろう？

「上はリビングみたいなもんだ。雨の日とか外出れねえからあそこで過ごす。寝すぎると頭痛くなるしな」

パティスの顔を見て、何が言いたいのか悟ってくれたらしい。端的に説明すると、「因みに寝床はあれ」と言つて黒塗りの木箱を指差した。

「棺？」

何てオーソドックスに「吸血鬼です」とアピールしているようなものに入つて眠るのだろう。

それを見て思わず苦笑するパティスに

「大きさが一番しっくりくるんだ。仕方ねえだろ」

自分もきつと同じように思っているのだろう。吐き捨てるようにブレイズがそう言った。

どこかぶっきら棒なその口調に、パティスはまたもや笑つてしまふ。

「探すのは紙だろ？」

本格的に笑われてしまう前に話を切り替えようと思つたらしい。

話題を無理矢理変えると、ブレイズは奥のほうにある棚の中をあまり始めた。

「残念ながら真四角のはねえなあ」

しばらくそこを物色してから申し訳なさそうにそう告げて振り返る。

手元には一枚の羊皮紙が引き出されていた。

「普通の紙でいいよ？」

何だか、契約書でも作って封蠟ふうろうなんかしたら似合いそうなその紙に、パティスは思わず腰が引けてしまう。

「これしかねえもん」

それなのにあっけらかんとそう言い返されてしまったては諦めるしかなさそうだ。

「見せて？」

ブレイズの横合いから紙の端っこをちよっぴり握って、その手触りを確認する。

「何とかなるかな」

ちよつと不安ではあるけれど。

神妙な面持ちをしてそうつぶやいたパティスに、

「じゃ、とりあえずこれ持って上がるうか」

そう言ってブレイズが引っ張り出した羊皮紙はパティスのひじから指先までぐらいの縦横幅があった。

ブレイズによってクルクルと丸められていくそれを見ているうちに、最初感じた神々しさを感じなくなつてパティスはホッと胸を撫で下ろした。

再び一階——ブレイズの自室——に戻った二人は、部屋中のランプに火を灯してから作業を開始した。

と言つても七箇所にあつたランプへの火は全て一瞬で点いたし、作業自体をするのはパティスの役目だったのだが。

散らかったアンティーク調のテーブルの上を片すと、パティスはブレイズが持ってきた羊皮紙をまず三角形に折った。

そうしてその三角の一边に沿つてもう一度紙を垂直方向に折ると、でき上がった長方形部分を丁寧に切り取る。

二つ折りになつた三角形を広げると、それは綺麗な正方形をしていた。

「ほらね、これで真四角よ」

得意げにでき上がったばかりの形良い四角形の羊皮紙をブレイズに向けてひらひらと振つて見せると、嬉しそうになつこり笑う。

いつものおしゃまな雰囲気とは違う、その子供らしい笑みは、パティスが童心に返っていることを容易に推察させた。

それを見たブレイズも、目を細めて柔らかな笑みを浮かべる。

「大したもんだな」

ポツリとつぶやかれたセリフも、いつものようにトゲを含んでいない。

「ママがね、教えてくれたの」

そこまで言つて、急に何かを思い出したように押し黙るパティス。「——？」

先ほどまでとは一変して表情の曇つてしまったパティスをいぶかしむように、ブレイズの視線が向けられる。

「ママのこと、久しぶりに思い出した気がする……」

まるで独白のように告げた言葉に、ブレイズがビククリしたよう

に一瞬目を見開くのが分かった。

「ママね、私が小さい頃に亡くなったの」

それはパティスが六歳になるかならないかの頃だった。

東洋系の血を引くパティスの母親は、母国の文化だという折り紙という遊びを、沢山沢山パティスに教えてくれたのだ。

「最初はね、鳥を折ったの」

母は「折り鶴」だと言っていたけれど、パティスには今一「ツル」がどんな感じの生き物なのか想像がつかなかった。ただ、形は鳥だったから、何となく白鳥を思い描きながら見様見真似で折ったのを覚えている。

そして、幼かったパティスは母のように綺麗な「折り鶴」が折れなくて、しばしば泣きべそをかいては母を困らせた。

「……パパとママね、そういうのが縁で知り合っみたい」

パティスが淡々と話す内容に、ブレイズは一切口を挟まないでいてくれる。でもこちらへ投げかけられている真っ直ぐな視線で、彼がちゃんと聞いてくれているのだと分かってとても嬉しかった。

話したければ話せばいい。聞いてやるから。

ここへ至るまでの道すがら、ブレイズが告げた言葉が脳裏によみがえる。

聞いて欲しい、と思った。

それは、今までずっと誰にも話さずに居たことだから。

「パパはアジアのほうの文化を研究する学者で、ママはパパが招かれた大学の学生だったの」

外国に単身で渡り、心細い思いをしていたパティスの父親を母はことあることに気にかけてくれたのだそうだ。

それが縁で芽生えた恋心。

国際結婚ということもあり、すんなり……というわけには行かなかったみたいだけれど、母のお腹にパティスが宿ったことで二人ともやや強行気味に一緒になってしまったという。

「私のせいかな、って思ったりしたの」

交通事故で母が突然この世を去ったとき、パティスはそんな風に思ったのだ。

もしも自分が母のお腹にできたりしなければ、母は遠い外国に来ることもなかっただろうし、こんな異国の地で事故死することもなかったかもしれない。そうして母国で、今でも元気に笑っていられたかもしれないのに。

それがママの運命だったんだよ、と父は慰めてくれたけれどパティスにはどうしてもそう思えなかった。

ずっとずっとそれがパティスの中でトラウマになっていた。

だからこそ、母に代わって父の面倒を見なければいけないと思ったのだ。

「パパが再婚相手連れてきたときにね、私、自分の生き甲斐をとられちゃうつて思ったの。そんなことするマリーンなんて大嫌い！

だからね、色々嫌がらせして追い出してやろうと目論んだの」

マリーンを追い出すために仕掛けた悪戯の数々を話しているうちに、何となく悲しくなってきた。あんなに酷いことをしたのにどうして彼女は出て行くと言わないのだろう。マリーンがそう言うてくれないと、パティスには居場所がなくなってしまうというのに。

そんなパティスの話を聞いていたブレイズが、一瞬笑った気がしたけれど、気のせいだろう。もう一度伺い見た彼は、すごく神妙な面持ちをしていたから。

「でも彼女、出て行ってくれなかったから。だから私が家を出ることにしたの。あの家には私が居る必要性なんてないんだもの」

「なあ、パティス。もしかしてお前、生れてこないほうが良かったって思ってるのか？」

今まで黙ってパティスの話を聞いていたブレイズが、初めて口を開いた。

「……うん」

力なくそう言うのと、「俺はそうは思わねえな」と言って頭に手を

載せられた。いつものようにふわり……とではなく、ズシンツという感じで載せられたブレイズの手に、叩かれたのかと思って一瞬ビクツとなる。

「だってな、生れてこなけりや出会えなかっただろ？」

それが誰と誰のことを言っているのか理解できなくて目をしばたたくパティスに、ブレイズが苦笑する。

「お前、自分のことになると本当疎いのな」

頭に載せたままの手を、そのままグシャグシャと動かして大雑把にパティスの頭を撫でると、ブレイズは聞こえるか聞こえないかの声音で「俺とお前」とつぶやいた。

その言葉が、やっぱり何を意味するのか取り損ねて束の間きょとんとしてから、数瞬置いて真っ赤になるパティス。

「な？ 悪かねえだろ？」

照れ隠しのためか、そっぽを向いてそう言ってから、「ポジティブ思考で行かなきゃ損じゃねえか」と真顔で付け加える。

「どうせ思い悩んだって生まれてきちゃったって事実は取り消せねえし、だとしたら良いほうに考えて前向きに行かなきゃ面白くないだろ」

ニツと笑ってそう言ってから「ま、俺も人のこと言えねえけどな」とつぶやいて苦笑する。

「ブレイズも？」

意外なその言葉に、パティスは自分のことも忘れて問い返した。

「だって俺、一人だしなあ」

ハアツと溜め息混じりにそう言うと、パティスの前に椅子を引きずってきて座るブレイズ。

「何で俺一人残っちゃったんだろう？ ってな」

一時期そんな風に思っていたのだと眉根を寄せる。

「もう百年ぐらい前の話になるんだけどな」

遠い目をして語り始めるブレイズに、今度はパティスが聞き役になる番だった。

外が騒がしくて目が覚めた。

「何があつたの？」

眠い目をこすりながら母親たちの元へ行くとギュッと抱きしめられた。

「大丈夫よ。何も心配いらないから。でも、何があってもここから出ちゃ駄目よ？」

そう言われて入れられたのが、屋敷の西側の最果てにある、隠された地下室だった。

「ママたちは来ないの？」

生まれたときから真つ暗闇でも見通せる目だったけれど、正直そこへ一人で入るのは怖かったから。

「ママもパパも片付けなきゃいけないことがあるの。それが済んだらすぐに行くから。だから良い子にして待っていてね」

父親はすでにその「片付けなければならないこと」に出向いたのか、姿がない。

「でも……」

それに不安を覚えて更に言い募ろうとしたら母親に「シー」と言われて唇に人差し指をあてられた。

「ブレイズは男の子でしょう？ 一人でも待っていていられるわよね？ 寂しくなったらこれに息を吹きかけてご覧なさい。きつと頑張れるはずだから」

手渡されたのは母が大事にしていた一冊の本。それは色んなことが書かれた本で、分からないことがあつたらこれを開いて調べてみなさい、というのが母の口癖だった。

「これ、僕が持っていて良いの？」

問いかけると一瞬、ちよつと悲しそうな目をしてうなずいた母。

「いい？ 何があつても我慢ができるギリギリまでここから出ちゃ

駄目よ？ 分かった？」

ブレイズがうなずくのを確認して、母は地下室の入り口を閉ざした。

それから何日間も、ブレイズはそこから出ないで両親の帰りを待った。

まどろんでは目覚めを繰り返し、次に目が覚めたときには二人が戻ってきているかも。そう思いながら幾日ものときを真つ暗な地下で本を抱えて過ごした。

けれど何度眠って目覚めてみても、母たちが戻ってくることはなかった。

一週間ぐらいそんなときを過ごしただろうか。

ブレイズはとうとう寂しさと空腹に耐え切れず、地下室の出入り口のところまで来てしまった。

思いを込めて手をかければそこは容易に口を開くはずだ。

頭上にある冷たい石の天井に手を置いて見たものの、躊躇してしまっ

た。

（もう開けても良いかな）

母はここで待っていなさい、と言ったのだ。

でも、こんなに長い間一人ぼっちにされたことがなかったブレイズは、言いつけを守らねばという思いと、置いてけぼりにされたのでは、という不安の中で意識が右往左往してしまっ

た。

「ママ……パパ……」

つぶやいた言葉に応えるものはいない。

そのときふと母が言った言葉を思い出した。

「息……」

母は寂しくなったらこの本に息を吹きかけてみなさい、と言って

いた。

寂しい思いを払拭するようにそれに息を吹きかけると、途端、手の中の本が待っていました、とばかりに身じろぎし始める。

「……え……？」

その様に驚いて啞然としているブレイズを横目に、本はパタパタと羽ばたいて宙を舞い始めた。

「あ、ちょ、ちょっと——！」

余りに急なことでどうしていいか分からないブレイズの眼前を、まるで擲擲するように本が飛んでいく。

夢中で追いかけていたら、いつの間にか地下室から出てしまっていた。

「あ……」

気付いて一瞬どうしようかと思ったブレイズだったが、とりあえず母親から預った大事な本を捕まえることを優先しよう、と思う。

本は、ブレイズがジャンプすれば少し上に上がり、走って追いつきそうになればスピードを速め……を繰り返し、付かず離れずの距離を保って逃げて行く。

夢中で本を追ううちに凶らずも屋敷外に走り出ってしまったブレイズを、やんわりとした満月が出迎えてくれた。

月光を浴びると、空腹が徐々に満たされていくのを感じる。人間を襲わずともそうやって月光浴をすれば、ある程度の飢えはしのげるのだと、そう教えてくれたのは父だった。

極力人の血を吸わずに静かに暮らしていたかったブレイズたちは、月光浴をするためによくこの庭へ出た。でも、今夜の庭は両親と歩いたときとは何となく雰囲気違って見える。一人で出たのは今回が初めてで、心細さをぬぐえないからだろうか。

ふと、一人ぼっちになってしまった自分の状況を思い出し、立ち止まってしまったブレイズのもとへ、逃げていたはずの本が舞い戻ってくる。

そうして、とあるページを開いてブレイズの手に収まると、その

まま動かなくなってしまった。

「星？」

開かれたページは星のことについて色々書かれた箇所、所々にアンダーラインが引かれていた。

『寂しいときは星を見上げましょう。』

沢山ある星の中に、いくつかひととき強く輝いて見えるものがあるはず。

それが貴方の大切な人。

遠く離れて今は会えなくなってしまった人です。

彼らは星になっていつでも貴方のことを見守っているのです。』

これは以前、母親に読み聞かせてもらったことがある話だ。

空に浮かぶ沢山の星々は、一つ一つが全て誰かの大切な人で、見上げたときに気になる星があったとしたら、それが自分にとってのそういう人なのだ、と。

「ママにもある？」と聞いたら「もちろんよ」と言って星空の一角を指差してくれた。でも、ブレイズには母がどの星を指したのか分からなかった。

「それはね、ママの星が貴方にとっての大切な人ではないからよ」

母はにっこり笑ってそう言った。

「ママ、パパ……」

つぶやいて空を見上げると、あの日は見えなかった明るい星が二つ、夜空に瞬いていた。

満月なのに、それにも負けないぐらいの強さで煌々と輝く二つの星。

それを見たら、何故だか分からないけれど涙があふれてきた。

何となく、もう両親に会うことはできないのだ、と幼いながらに悟った。

「結局後で考えてみると、あの日、町の連中が屋敷を襲おうとしたんだと思うのな」

ブレイズたちはさして害は与えていないはずだったけれど、そこに異形がいると思うだけで町の人たちには許せなかったのだろう。遠い目をして語るブレイズを、パティスは何も言わずに見つめることしかできなかった。

「屋敷の周りに結界があっただろう？」

無言で見つめていたら、突然そう問いかけられた。

「う、うん」

「あれな、両親の張った結界なんだ」

てつきりブレイズが施したものだと思っていたので、パティスはそのセリフに一瞬ばかんとする。

「俺の力じゃ、こんな頑丈な結界は張れねえよ」

でも、何となくその言葉に納得した。こんな大きな屋敷をすつぱり見えなくしてしまえるほどの結界なのだ。相当の能力がある者でなければ創り出すことは困難だろう。

「推察だけだな、親父やおふくろがやらなければならぬと思ったことはその結界を張ることだったんだと思う。俺だけでも助けたかったんだろっよ」

それは、今でも思い出すとブレイズのなかに苦いものをにじませるのか、苦笑を浮かべてブレイズが言う。

「何で俺だけでも、って思っただろうな」

それを、眼前の青年はずっと考え続けていたのだろうか。

そう思いながらブレイズを見つめていたら、紅玉の瞳がひたとパティスをとらえた。そうして穏やかな笑みを浮かべて言う。

「でもな、お前見てたら当たり前かもなっと思えるようになってきたぜ？」

いきなり告げられた言葉に、パティスは何の話だろう？と首をかしげる。

「庇護欲、だな。——きつと」

自分より弱いものを放っておけないと思うのは人間も吸血鬼も変わらないのだと、ブレイズは言った。

「だからな、お前も親御さんを悲しませちゃいけないと思うぞ？」
自分ですら守ってやりたいと思った少女なのだ。その肉親が心配していないはずはないだろう？とブレイズが表情を硬くする。

「でも……」

言い募ろうとしたら唇に人差し指をあてがわれてそれ以上は言わせてもらえなかった。

「パティス、さっき鳥が折れるって言ってたよな？」

話が一段落ついたところで沈黙が流れ、その間を持て余したパティスが手元の羊皮紙に視線を落とすと同時に、ブレイズにそう問いかけられた。

「え？ ええ」

鳥、というか鶴なんだけどな、と思っただけ口には出さない。

「そっちの余った紙で小さい正方形を作ったらそいつで折れるか？」

「……？ うん。簡単だから多分大丈夫」

ブレイズはいきなり何を言い出したのだろうか？

きよとんとして見つめ返すと、

「でき上がってからのお楽しみ♪」

ニヤリと笑ってそう告げられた。

それで、とりあえず折り鶴を折り始めたパティスである。

正方形を作るときに三角形に折らねばならないので、折り出しが三角から始まる鶴は、ある意味おあつらえ向きだといえた。

「はい、できたわよ？」

数分間で折り上げた、こじんまりとした鶴をブレイズの手のひらに載せると

「上等！」

ブレイズが嬉しそうに微笑んだ。

「ね。――で、何するの？」

約束通り作ったのだから教えて頂戴。

そんな目をして見つめると、またしても「楽しみは最後まで取っとくもんだぜ？」とかわされてしまった。

「ブレイズの意地悪！」

ふうーっと頬を膨らませて見せたけれど、笑われただけで効果なし。

仕方なくパティスは最初に作った大きな正方形を使ってとつておきのものを折ることにした。

「なあ、何折ってるんだ？」

折り始めてしばらくすると、興味津々の顔をしてブレイズが覗き込んできた。でもさっきのお返し、とばかりに「お楽しみは最後までとっておくものよ？」と言い返してやった。

何だかそれで胸のつかえが下りた気がして、パティスは我知らず微笑んでしまう。

「お前、根性 悪いぞ？」

ブレイズに言われたくないが、何だかそう言われると教えてあげなければいけないような気がしてしまうのが不思議だ。

「……犬よ」

ぼそつとつぶやくと、ブレイズがきょとんとした顔をして見つめてきた。

「だから、ワンちゃんよ！」

最後のところを折って、ちょっと立体感をつけると、でき上がったばかりのそれをブレイズの眼前に突きつける。

「お、すげえー！ 本当に犬になってんじゃん！」

そのでき映えに、素直に感動してくれるブレイズを見て、何となくすぐつたい気持ちになる。

「ブレイズにも折り方教えてあげようか？」

嬉しさに押されるように問いかけると、ブレイズが「いいのか！？」と瞳を輝かせて詰め寄ってきた。

「もちろん。……あ、でも……紙がないね」

ふと見れば、机の上には鶴を作るときに切り落としたとっても小さな長方形の紙片があるだけ。

もともと紙は一枚しかなかったのだ。

鶴と違って初心者向きではない犬作りに、その小さな破片^{かけら}が向いているとは到底思えなかった。

「どうしよっか？」

考え込むようにあごに手を当ててうつむいてしまったブレイズを見て、パティスは何かとつても申し訳ない気持ちになる。

「明日、日が昇ったら買い物とか一人で出れるか？」

意を決したように告げられたセリフに、パティスは瞳をしばたたく。

「え？ でも……それじゃあ」

「あゝ。帰りが一日伸びることになるよなあ。……やつぱそりや、まずいか」

パティスの考えと同じことに思い至ったらしいブレイズが眉根を寄せて再び考え込む。そんな彼に、パティスは思いつきり首を横に振ってみせる。

「それ、いい！ 一日も二日も一緒だよ！ 明日町に出たらちゃんと家に電話するし……それならいいでしょう？」

少しでも長く一緒にいたいパティスの勢いに押されるように、ブレイズはうなずいた。

結局明くる日の日中も、パティスは動かねばならないので今夜はもう寝たほうが良いのではないかという話になった。

「ソファでも眠れるか？」

部屋の中を見回すと、ベッドもないことはないが、長い間使われてないらしく、埃と汚れがすごい。そんなところに寝転んだら一瞬にしてアレルギ―が出そうだ。年代ものではあるが、そこその頻度で使われて、手入れの行き届いているソファのほうが絶対によさそうに見えた。

チラリと両者を見比べて、パティスはコクンとうなずいた。

「お前、今、ベッドとソファ、比較しただろ？」

苦笑しながらブレイズが言う。

「ちよつと躊躇^{ためら}い、でも事実だったので恐る恐る首を縦に振ると「そういうの、生きていくうえで大切なことだぞ」と褒められた。

ブレイズはときに年寄りじみたことを言う。これが、見た目とは

比べものにならないくらい長い年月を生きてきたことの現われなのだろうか。

ふとそんなことを思い、彼をじっと見つめてしまった。

「何だ？」

途端、深紅の瞳がこちらを向いて、パティスの心臓は口から飛び出しそうなくらい勢いよく跳ね上がる。

「添い寝してくれと言っくんじゃねえだろうな？」

どこか揶揄するような口調でそう言うと、ブレイズは出会ったばかりのころのような意地の悪い表情を向けてニヤリと笑った。

「だ、誰が——っ！」

……添い寝なんて……ゴニョゴニョ。

真っ赤になって語尾を濁すパティスの頭をブレイズがグシャグシヤと撫でる。

「んじゃ、もう寝な？」

「……ブレイズは？」

「だから俺は一緒には……」

「そういう意味じゃないってば！」

先手を打ってブレイズの軽口を封じると、パティスは言葉を少し丁寧にした。

「ブレイズは私が眠った後、どうするの？」

それが、何となく気になった。

別に襲われるんじゃないか、とかそういうことを心配したわけではない。ただ、自分の目の届かないところで彼が何をするのかが心配になっただけ。

「あゝ、まあ、その……」

ブレイズの、歯切れの悪い物言いにパティスはにわかに不安になる。

「もしかして……食事に？」

それは、ブレイズがパティスから離れて誰か綺麗な——ここはパティスの思い込みだが——女性のもとをおとなうということ。

「……嫌だ」

それは嫌だと思った。

「私が眠るまでそばにいて……？」

添い寝の話ではない、と言ったけれどこれではそうとられても仕方ないかも。思いながらも言わずにはおられなかった。

消え入りそうな声音で懇願するパティスに、予想とは反してブレイズの表情は柔らかかった。

「じゃあねえなあ」

ぼんぽん……。頭を軽く撫でながら。

「ほら、寝るまで付いててやるから横になれ」

そう言ってソファを指差す。

「う、うん……」

自分から頼んだくせに、いざOKと言われると顔から火が出そうなくらい恥ずかしかった。

ソワソワと落ち着かない表情でソファに横たわったパティスに、ブレイズが上着を脱いで着せ掛けてくれる。

「布団ねえからこれで我慢してくれ」

初夏のこと。冬ではないから何も着なくても大丈夫なくらいだ。小さくうなずくと、パティスは上着を引っ張り上げてその陰に顔を半分隠す。

恥ずかしすぎて本当は上着の下に、真ん丸になって隠れてしまいたいくらいだ。でも、それはさすがに我慢した。

「こら」

でも、ブレイズはそれすら許してくれないらしい。

「顔が見えなきや寝たかどうか分かんねえだろ？」

確かに……。

仕方なくほんのちよつとだけ上着から顔を出して、ブレイズのほうを見つめると、彼の顔が思いのほか近く感じられて慌てて目を伏せる。

（やっぱり恥ずかしいよお……）

真っ赤になつて泣きそうな顔をするパティスの髪に、ブレイズが優しく触れる。

「パティス、手え出せ」

そうされながら、耳元でささやかれた声に、恐る恐る彼に近い側の手を差し伸べると、そつと握られた。

「……？」

重ねられたブレイズの手の中に何やら硬いものがあつて、何だろ？と疑問を抱く。「何を持っているの？」と問いかけようとしたら、

「おやすみ」

まるでそれを阻止するかのようにブレイズの耳障り良い声と同時に、部屋中の燭台の明かりが一斉に落とされてしまった。

その行動にちよつと含みを感じたけれど、手を握ってもらっていることのほうが嬉しいパティスは「まあ、いいか」と思い直す。

急に明かりを消されたのも、ちつとも怖くなかった。何より自分の視覚でブレイズを感知できなくなったことでドキドキしていた緊張の糸を緩めることができて幸いなくらいだった。

「……おやすみなさい」

ブレイズにそう返して、パティスは今度こそゆつくりとまぶたを閉じた。

目覚めると、既にブレイズの姿はなかった。

それもそのはず。締め切られた雨戸の隙間から細い光が射し込んでパティスの顔を照らしていたのだから。

「朝……？」

夜更かしのためか、すっきりしない頭を振って身体を起こすと、ちょうど目が陽光の当たる位置にきてしまった。

「眩し……っ！」

パティスは目を^{すが}眇めると、手でひさしを作りながら辺りを見回す。日が射し入っているとはいえ、雨戸の締め切られた部屋の中。パティスの目は太陽光に射られた状態から薄暗い屋内に慣れるまで、しばしの時間を要した。

何となく像を結び始めた視界のなかに、アンティーク調の机が入る。近付いてみると、その上には昨夜切った羊皮紙の紙片が散らばっていた。

「良かった……」

記憶のなかにある光景は夢じゃなかった。それを見て安堵したパティスの足に、不意に何かが触れる。

「え？」

驚いて足元を見ると、茶色の毛むくじやらが左右に揺れていた。

「……しつぽ？」

そう認識した途端、その持ち主に押し掛かれて、パティスはソファの上に押し戻される。

「……な、何で犬がいるのよぉ！」

昨夜はこんなの、いなかったはずなのに。

嬉しそうに舌をダランと垂らしてパティスの顔を舐めようと頑張る犬を、手で必死にガードしながらそんなことを思う。

「もしかして……」

ハッと思い至ると、パティスは犬を押し退けて立ち上がった。

そんなパティスに、犬は懲りずにまわり付いてくる。それが、余りに鬱陶しかったから

「おすわり！」

思わずそう叫んだら、犬はぴたりと動きを止めてその場にお行儀よく座った。

「……言うこと、聞けるんだ……」

それにホッと胸を撫で下ろすと、パティスは昨日作った折り紙の犬を探した。

「やっぱりない……」

部屋をざっと見回してみたけれど、それらしきものはどこにもなかった。

「もしかして……貴方はあの折り紙のワンちゃんなの？」

問いかけると、犬は「そうだよ」と返事するように「ワン！」と吠えた。

「そっか……」

ブレイズならこんなことができて不思議ではないかも。

そんなの非常識で有り得ないことだと分かっているけれど、どうしてもそれを肯定してしまう自分がいる。

「ねえ、ブレイズは何か言っていなかった？」

聞いても無駄かもしれないけれど、この犬がブレイズの力で動いているのなら、答えてくれるのではないだろうか。

犬は小首をかしげてパティスの言葉を吟味するような素振りを見せていたが、唐突に歩き出すとアンティーク調の机に足をかけて立ち上がった。

まるで赤ちゃんがカタカタを押しているような格好で立ったまま、パティスをじっと見つめる。

その視線に促されるように犬のところへ行くと、前足の下に四つ折にされた羊皮紙の紙片があった。

開いてみると、それはブレイズからパティスへ宛てられた、一通

の手紙だった。

『親愛なるパティスへ。

おはよう。

もしかして俺が作った（って言ったら語弊があるな）犬に起こされたかな？

陽が昇る前に、俺は地下へ降りることにする。本当は声をかけてから行こうと思ったけどあんまり気持ち良さそうに眠っていたから起こさずにおくよ。

この机の右端、上から二段目の引き出しに金を入れておく。それで欲しいものを買っておいで。

出かけるときは犬も忘れず連れて行くように。そいつと一緒になら境界の出入りも自由にできるはずだから。必要なら名前も付けていいぞ。

それから……もし町に出てそのまま家に帰りたくなったら……遠慮は要らないからな？

戻って来い、なんて強制はしない。

パティスのしたいようにして欲しい。

『ブレイズ』

最後の辺りがなんだかブレイズらしいな、と思った。

気遣いは嬉しいけれど、その反面、何だか淒く腹立たしい。

「戻って来るに決まってるじゃない」

不満をぼつんと口の端に乗せると、パティスは顔をじっと見上げてくる犬の頭を撫でた。

「手紙のこと、教えてくれて有難う。……えっと——」

礼を言いながら犬を見つめ、しばしの後

「……ナスター」

そう、呼ぶことにした。

空は昨日とは打って変わって曇天に覆われていた。重く垂れ込める鈍色の雲のせいで、見上げてみても月も星もない。

そんな薄暗い宵の口に、パティスはナスターを伴って石畳の上に座り込んでいた。

自分ではどうしようもないのが悔しいけれど、ちょうどこの辺りにブレイズが眠る地下へと通じる入口があるはずだ。

昼間買ってきたランプを置いて、その傍にしゃがみ込む。ナスターはそんなパティスの横へ、おとなしく座っていた。

「ナスターじゃ、ここ、開けたりはできないよね？」

問えば犬は申し訳なさそうに頭を垂れた。

「やっぱ無理かぁ。……ブレイズ、早く目覚めてくれないかなぁ」
本当は眠っているブレイズの顔を間近で見なかった。

深紅の瞳が炯々（けいけい）と光る様もキリリとしていて好きだけど、そのまぶたが閉ざされた顔も、きっと素敵だらうな。そんなことを思って一人ドキドキする。

「はぁ。残念……」

それが見られないと思うとすごくガッカリした。

「――何が？」

と、突然頭の上から声がして、パティスはビクッとしてしまう。

声のほうに視線を転ずれば、いつ出てきたのか、ブレイズが立っていた。

「なっ、何でもないっ！」

早鐘を打つように飛び跳ねる心臓を抑えながら、慌てて立ち上がってそう言つと、

「帰って、きたんだな」

安堵したような、怒っているような複雑な心境を感じ取れる声とともに抱きしめられた。

「……ブレイズ？」

問いかけても返事がない。そのままじっとしていると、落ち着きなく高鳴っている鼓動がブレイズに知られてしまいそうで怖くなった。そう思ったら余計に動悸が激しくなつて、パティスはますます動転する。

「……バカだな」

耳元でそうつぶやかれても、ちっとも腹が立たないのはそのせいだろうか。それともブレイズの声が言葉とは裏腹に優しいせい？ ナスターが、そんな二人をきよとした表情で見つめながら尾っぽを左右に振っていた。

パティスの買い物は、結局隣町まで出る羽目になった。

ブレイズの館から戻ってきたパティスを見て、町の人々がこぞって門戸を閉ざしてしまったからだ。

「電話はしたのか？」

一階の部屋で、苦勞して買ってきた紙の束を広げたパティスに、ブレイズが問いかける。

「……え？ あ、もちろん……！」

本当はかけていない。かけてマリーンが出たら何と言ったらいいのかわからなかったし、父が出たら泣きつかれそうで嫌だったからだ。

それに、何よりパティスはブレイズと離れたくない。

電話をかけることは、まるでおとぎの国のような今の幸せから現実の世界に引き戻されるきっかけになりそうで怖かった。だからパティスは家に連絡を取ることをしなかった。

「……そっか」

嘘を見抜かれてしまうかとドキドキしていたパティスだったが、案外あっさり信じてもらえて今度は逆に申し訳ない気持ちになる。

「あのね、ブレイズ」

それで、ではないが何となく饒舌じょうしつになってしまった。

「……ん？」

「紙ね、本当は色んな色のほうがいいかなって思ったの。でも……ブレイズにはこの色が一番似合う気がしたから……」

パティスが広げた紙は、よくぞここまでそろえたと思えるほど、どれもこれも深い射干玉色ぬはたまのものばかりで――。

「黒が？」

「そう。だってブレイズ、服も真っ黒だし髪の色も綺麗な漆黒だったから」

穏やかな夜のイメージで選んだのだとパティスがつぶやく。

「……嫌だった？」

恐る恐るそう尋ねると、ブレイズは「いや、いい色だと思うぞ」と言って笑ってくれた。その表情にホツとするパティス。

「ナスターにもね、茶色よりこの毛色のほうがしっくりくると思うの」

「ナスター？」

きょとんと見つめ返されて、パティスはこの犬にそう名付けたのだと告げていなかったことに思い至る。

「この子の名前よ。夜の星。ナイトスター。略してナスター」

実はこの名前には、昨晚ブレイズが話してくれた星の話が多分に関与している。願わくは、自分もブレイズにとってのそうでありたいという気持ちが込められている。

「お前、いい名前、もらったな」

変な名だと言われたらどうしようかと不安だったけれど、ブレイズはそう言ってナスターの頭を撫でてくれた。それでパティスも自然と顔がほころんだ。

「気に入ってくれて良かった」

もしかしたらブレイズの気遣いかもしれないけれど、ここはその言葉通り受け取ることによいと思う。

「じゃ、ナスターの折り方教えるからこっち来て」

長方形の紙を先の夜と同じ手順で正方形へと生まれ変わらせると、

パティスはブレイズに手招きをした。

その声に、ブレイズが近くにあった椅子を引き寄せてパティスの横へ座る。

「私が折る通りにやってね。まずはここを折るでしょ？ それから……」

何度目かの手順を重ねたところでブレイズの手元を見ると、どうやったらそうなるの？という形になっていた。

「もう！ ブレイズったら私がやるの、ちゃんと見てた？」

最初はそんな風に叱咤していたパティスだったが、同じことを何度も繰り返し、諦めの溜め息をついた。

「ブレイズには無理そうだね……」

苦笑しながらそう告げる。

「あ、ああ……」

本当なら反論したいところだろうが、こう何度も失敗をしていては、何も言えないらしい。

こちらも諦めたようにうなずくと、ブレイズは思い切り伸びをした。

「俺は命を吹き込むほうに専念するわ」

そうしてポツンと付け足した。

「そのほうが良いかも……」

これ以上紙を無駄にされるのも勿体無い気がするし。そう思ってパティスも彼の言葉に賛同する。

「でも、今はこの子がいるし、他の子には息、吹き込まなくても平気よね？」

ブレイズに教えるために折った子たちだけで既に三十匹は超えている。それらの折り紙犬たちを見つめて恐る恐るそう尋ねるパティス。狭い部屋の中、この犬たちが全て動き出したら、と思うとゾツとした。

「……保険に取っとくよ」

雨戸を閉ざした、小さな窓を見つめながらポツリとつぶやかれた

ブレイズの言葉に、何の？と問おうとしたら、力ない微笑みを返された。

その微笑に、突き放されたような寂しい気持ちがして、パティスの胸は締め付けられる。

「どうやらもう、時間みたいだ」

ブレイズの言葉とともに、どこから飛んできたのか一羽の小鳥が彼の肩にとまった。

闇夜に飛ぶ小鳥。その不思議に、パティスはハッとしてブレイズを見つめる。

「パティス、迎えが来たぞ」

そう告げた彼の肩にいるのは、紛れもなく昨夜パティスが作った折り鶴だった。

「おいで」

肩に小鳥を乗せたまま立ち上がったブレイズに導かれるまま彼の傍らに寄ると、そつと抱きしめられた。しばらくそうされた後、何の前触れもなく両手を後ろ手に縛られ、パティスは困惑する。

「ちよつ、いきなり何っ!？」

余りに急な展開に頭がついていけず、戸惑いながら彼を振り返ると、思わずすくんでしまいそうな冷たい双眸がそこにあった。

先ほどまで尻尾を振りながら二人を見ていたナスターも、それに呼応するようにピクリとも動かなくなる。

「ブレイズ……?」

恐る恐る呼びかけてみたけれど、彼の表情に、先ほどまでの笑顔はない。

そのままブレイズに引きずられるようにして屋敷の外に出ると、黒々とした鬱蒼たる森を背に、白い人影が立っていた。

月も星もない、どんよりとした空は闇の色がただただ濃いばかりで、パティスには森と空の境目がよく分からなかった。

「パティスちゃん!」

ブレイズの前に、引つ立てられるようにして連れ出されたパティスを見つけると、人影はそう叫んで駆け寄ろうとした。

それを、ブレイズが片手を挙げて制すると、

「一人か?」

底冷えのするような声音で尋ねた。

今までの彼とはまるつきり雰囲気の違いブレイズに、パティスは何が何だか分からなくなる。今からでも遅くはない。これは夢だと笑いかけて欲しい。そんなことを願いながら振り返り見たブレイズは、前方の人影を凍てつくような冷めた目で見据えていた。その表情に、パティスはささやかな想いが打ち砕かれたことを知る。

「ええ。貴方の言う通り一人で来たわ。だからその子を放して頂戴」
日頃の、のほほんと微笑む彼女しか知らないパティスは、凜と放たれた強い声音に驚いて瞳をしばたたく。

パティスの知る彼女は――マリーンはもつと頼りない、パティスが右だといえは何の疑いも持たずそちらに流れて行ってしまうような女性だったはずだ。そんな彼女が、自分を取り戻すためにこんな闇夜の森を一人、歩いてこられるはずがない。

「いいだろう。だが、交換条件がある――」

そうしてパティスを盾にマリーンと交渉を続けるブレイズも、こんな硬質な雰囲気をもった青年ではなかったはずなのに。

何もかもが自分の知るものとは違ってしまっていることに、パティスは軽い目眩を覚えた。

そんな彼女を置き去りにして、二人の会話は進んでいく。

「何でも聞くからパティスを放して！」

そこに佇むのは、母親の顔をした一人の女だった。遠い昔、パティスを抱きしめてくれた女性ひとと同じ――。

「……ママ……？」

知らず口をついて出た言葉に、パティスは自分自身驚愕する。そんなパティスを一瞥して、ブレイズは信じられない一言を発した。

「あんたがこいつの代わりに俺と残るなら」

ブレイズが寂しいのは分かっていた。でも、だからと言って自分と引き換えにマリーンに残れ、だなんて……そんなことを言うとは思わなかった。だってさつき、ちゃんと話したはずなのだから。父親にはマリーンがいて、自分には居場所がないのだということ。

「私を残せばいいでしょう!？」

思ったと同時に激昂してそう叫んだパティスを、ブレイズが鼻で笑う。

「お前、馬鹿だな。俺があの子を残れば元通り親父と二人きりの暮らしに戻るじゃないか。なのにそれを棒に振るってのか？俺がそれを了承したらお前は父親を取られることになるんだぜ？それ

でもいいのか？——まあ、もつとも……」

そこでパティスとマリーンを見比べ、

「どうせ残らせるんならやっぱり大人の女でないと面白くねえけどな。どっちを残すか決定権があるのは俺だ。お前じゃない」

いつか、馬鹿にして悪かったと告げたのと同じ口、同じ声で前よりも数倍酷いことを言う。

薄らと人を見下すように口の端に刻まれた笑みも、パティスには堪らなく悲しかった。

「ブレイズの馬鹿！」

パティスの悲鳴のような叫びなどお構いなしといった様子で、視線をマリーンに転ずるブレイズ。

「さ、どうする？」

静かな声でそう問えば、

「分かったわ。でも……約束は守ってくれるんでしょね？」

微塵も臆した様子なくブレイズを睨み返すマリーンがいた。

「……ダメッ！」

マリーンはブレイズのことをどこまで知っているのだろうか？ 彼

がヴァンパイアだと知っていてそう言っているのではないはずだ。

今のブレイズはパティスの知っている彼ではない。だとしたら……

……マリーンの血を一滴残らず吸い尽くしてしまっても不思議ではない気がする。

ふとそう思い至り、パティスは身体が震えるのを止められなくなつた。

「駄目よ！ だってブレイズは——っ！」

吸血鬼なのに！ そう言おうとしたら、全て知っている、言いたげなマリーンの瞳とぶつかった。全部承知でパティスの身代わりになるうとしているのだと、その目は語っていた。

「嫌だ！ ブレイズ！ 私、本当はマリーンのこと好きなの！ 意地張ってただけなの！ でなきゃ死んだママに申し訳なかったんだもん！ お願い！ 私からママを奪わないで！」

後ろ手に縛られた状態のまま、ブレイズにぶつかるとしてそう訴えると、

「——やっと本音が出たな」

その声と同時に戒めが解けた。

何の前触れもなく自由になった両腕で、勢い余ってブレイズの胸を叩く格好になってしまったパティスは、ぬくもりのある彼の声を耳にして、瞳を見開く。

「……お前、本当素直じゃないよな」

苦笑しながら悲しげに微笑むその声は、パティスの知っている彼のものだった。

「ブレイズ？」

何が何だか分からなくて立ち尽くすパティスに、ブレイズがウィンクをしてみせる。

それから、パティスと同じように呆然と立ち尽くすマリーンに軽く頭を下げると

「すまなかった。だまして怖い思いをさせちゃったな」

謝罪の言葉を述べた。

「どう……いう……意味？」

まだことの顛末が理解できないパティスが、恐る恐るそう切り出す。

そんなパティスの傍らに歩み寄ってきたマリーンも、パティスを守るように娘の肩をそっと抱いてブレイズを睨んだ。その瞳には、まだ彼のことを信じきつてはいないのだという猜疑心が垣間見える。「素直じゃないお前の性格から考えて、正攻法で攻めたって絶対落ちないって思ったんだよ」

大きな溜め息をつきながらそう言ったブレイズに、パティスが膨れっ面をする。

「私、いつも素直にしているつもりよ!？」

「あくまでもつもり、だろ？」

なおも苛烈な目をして自分を凝視するマリーンを、気の毒気に眉

根を寄せて見つめると、ブレイズは言葉を続けた。

「お前、彼女のこと嫌いだって言う割に追い出そうとする方法がやけに子供じみててらしくないの、気付いてなかったのか？」

カエルを捕まえてくるだの、洗濯物を増やすだの、大人びたパティスにはおよそ似つかわしくない嫌がらせばかりだったじゃないかとブレイズが苦笑する。

パティスからその話を聞いて、本当は甘えたいのにできずにいるんだな、と悟ったのだという。

「そ、そんなことないもん！」

虚勢を張って言ってみただけで、それが無駄なことはパティスが一番良く知っていた。マリーンを追い出すための作戦について語ったとき、ブレイズが笑ったような気がしたのは気のせいではなかったのだ。

それに、無意識のうちにマリーンのことを「ママ」と呼んでしまった自分が居ることも今更否定できないし、彼女のことを好きだと認めてしまったのも取り消せないだろう。

「素直になれよ」

言われなくてもそうしたい。

うつむいて黙り込んでしまったパティスに、今まで後ろから肩を抱くようにしていたマリーンがパティスの前にしゃがみ込んだ。そうして泣きそうな顔をして唇を噛み締めるパティスを、しっかりと抱きしめる。

その仕草がただただ嬉しくて、パティスは涙が堪え切れなくなってしまう。

ぼろぼろと大粒の涙をこぼして泣きじゃくるパティスに、ブレイズが安心したような、どこか寂しげな複雑な微笑を投げかけた。

「これで胸張って家に帰れるな！」

全ての想いを断ち切るように、元気すぎるぐらいはきはきとした声でそう宣言すると、ブレイズは二人の前に小鳥とナスターを差し出す。

「森を抜けるための道案内はどっちがいい？」

問えば、マリーンは小鳥を、パティスはナスターを指差した。

「じゃ、どっちも連れて帰りな」

言って、何事もなかったように微笑むブレイズに、パティスはどうしようもなく切なくなる。

「ブレイズは——っ!？」

残ると言うのは分かっているけど、聞かすにはおられなかった。

また、この広い屋敷で一人過ごさねばなくなるブレイズを思うと、胸が締め付けられる気がした。

「俺にはパティスが作ってくれた沢山のナスターたちがいるから平気だ。それに……ちつとばかり厄介だが母さんが残してくれたディックもいるしな」

出会ったところのようにどこか小憎たらしい顔をしてニヤリと嘲笑うブレイズを見ても、パティスの心はざわついたままだった。

「でも……ブレイズ! 私が作った子達は有限なんだよ!？」

無限のときを生きていかなばならないブレイズにとって、あれしきの数の犬たちが、一体どれほどの慰めになるというのか。

マリーンの腕をすり抜けると、ブレイズに抱きついて抗議するパティス。

「私、やっぱりブレイズと一緒に残る!」

下から見上げるように懇願するパティスを一度だけギュッと抱きしめると、ブレイズは彼女をそっと引き剥がした。

「それはできない。んなことしたら俺はパティスの両親から大切な娘を奪うことになっちゃう。お前、俺を悪者にしたいのか？」

パティスの前にしゃがみ込むと、諭すように静かな声音でそう問いかけるブレイズ。

涙の乾き切らないパティスの頬にそっと口付けてから

「約束しないか? パティスが大きくなって……親御さんの力を借りなくても一人で生活できるようになったら……また会いに来てくれ。お前が尋ねて来られるよう、俺は毎日ナスターを公園まで迎え

に出すようにするから。——な？」

そう提案した。

先ほどまでは厚い雲に覆われていた空から、嘘のように晴れ間が覗いていた。

空には満月よりやや欠けた形の月が顔を出していて、三人が佇む地面に淡い月光を降り注がせている。

「約束……？」

月光を受けて濡れ光る目でブレイズの紅玉の瞳を真っ直ぐに見つめると、パティスはそうつぶやいた。

「そう。月に誓って約束しよう」

ブレイズが優しくうなずくのを確認して、パティスは彼から離れる。

「絶対だよ？」

何度も何度も振り返り、振り返りしながら遠ざかっていく二つの人影を見つめながら、ブレイズは月に祈りを捧げずにはおられなかった。

——どうかまた彼女と会えますように、と。

あれから十年。

裏庭の一角に三十数個目になる塚を作り終えたブレイズは、我知らず溜め息を落とす。

全てのナスターが紙屑と化してしまった今、ブレイズにはパティスとの約束が果たせなくなってしまったかも知れないという懸念があった。

この町の住人に忌み嫌われている自分では、毎晩のように公園でパティスが訪れるのを待ち続けることは不可能に近い。そんなことをしたならば、狩ってくださいと言っているようなものだからだ。殺されてしまったのでは本末転倒になってしまう。

あの日、マリーンを迎えにやらせた折り鶴のような飛翔物体でも作ればよいのだが。

ふとそう思いついてはみたものの、肝心なパティスのおいを追わせることができないのに思い至って振り出しに戻る。

十年という歳月は、ブレイズにとってはほんの束の間だけれど、屋敷内からパティスがいた痕跡を消すには十分な時間だった。

ソファに横たわるパティスの手と、自分の手との間に折り鶴を挟み込み、それに彼女の家を追跡するためのにおいを染み込ませたのはつい昨日のことのように覚えている。折り鶴を挟んで添えられた小さな手の温もりだって、今でもはつきりと思い出せるのに。

どうして屋敷内のどこを探してみても、パティスの残したものがないのだろう。

唯一の頼みの綱だったナスターも、最後のひとつを今、葬ったばかりだ。

見上げれば、パティスと初めて出会ったあの晩のように、煌々と輝く満月が出ていた――。

こんなに一人が骨身に沁みて感じられたのは久しぶりだ。

「……パティス、お前、俺のこと覚えてるか？」

つぶやきは月光に吸い込まれるように消えていく。

いつか、願いが叶ってパティスと再会できたとき、心を込めて「お帰り」と告げたなら、今みたいに月光に吸い込まれずにちゃんと彼女の耳に届くだろうか？

ブレイズの周りを心配そうに飛び回るディックの存在も、今は慰めになりそうになかった。

開くたびに時々刻々とその内容を変えるディックにも、きっとパティスの見つけ方は載っていないだろう。

「ついてねえなあ」

言葉にしてみると、余計に辛くなった。

「はあ……」

今夜、何度目になるか分からない溜め息をつくとき、ブレイズは何かを断ち切るように手に付いた泥を勢いよく払い落とした。

そうしてもう一度月を仰ぎ見ると、きびすを返して歩き出す。

毎日、とはいかないまでもなるべく目立たない範囲で公園に向向いてみようと思いついた。

ここでもうして嘆息していたって事態は好転しないのだから。

そう、気付いて――。

裏庭から屋敷を抜け、正面玄関の木製扉を開けたところで、いきなりなかに押し戻された。

「え……？」

何があだか分からなくて、恐る恐るもう一度扉に手をかけて押し開けると、隙間に割り込むようにして、何かが飛び込んできた。

「こら！ 待ちなさいってば！」

重々しい音をたてて再び扉が閉じる。その寸前、そんな声が外から聞こえてきて、ブレイズは一瞬頭が真っ白になった。

この、どこか懐かしさを含んだ声音は――。

「……パティス？」

いや、でも、まだ屋敷を取り囲んだ森の結界は健在なはずだ。彼女が何の導きもなしにここへ至れるはずがない。

そこまで考えたところで、ブレイズは床になぎ倒された。

「……な、ナスター……っ？」

自分の上に押し掛かって顔を嘗めようと頑張っている犬は、この十年慣れ親しんだ愛犬とは違い茶色い毛並みをしていた。でも、それは紛れもなくナスターで……。

ブレイズのナスターたちと異なるその毛色は、この犬が羊皮紙でできていたことを思い出させた。

紙より強く、保存が利く羊皮紙。

それが幸いして、このナスターは今まで無事でいてくれたのだろうか。

性格自体は自分の知る黒犬たちと殆ど変わらないように思う茶色いナスターを見て、顕在でいてくれて有難うと心の底から感謝する。

「ブレイズ！ 居るんでしょう！？ ここ、開けて？ 折角約束通り会いに来たのにナスターだけ特別扱いはずるいわ！」

木戸を一枚挟んで投げかけられた声は、やはりこの十年間、片時も忘れたことがない、パティスのものだ。

「パティス！」

その声にはじかれるようにナスターから逃れて重い木戸を押し開ける。

扉が開くのに従って屋敷内に入り込む月光を背に、パティスが立っていた。

「戻ってきたわ！」

言つと同時に飛びつくパティスを抱きしめながら、ブレイズはもう気安く彼女の頭を撫でたりできないな、と思う。

「私、今度こそ本物の大人の女性よ！ ^{レディ} もう、貧乳なんて言わせないんだから！」

ブレイズを見上げるパティスは、彼女が言う通り、女性らしいまろやかなラインをしていた。そこには昔、ブレイズがペチャパイとからかった、幼い少女の姿はなくて――。

「そうだな……。もう、立派なレディだ。そんな姿を見せられちゃ、もう、あのときみたいに家に帰してやることはできねえな。それでもいいのか？」

口調とは裏腹に、どこか不安げな表情でそう問いかけるブレイズに、

「帰れって言われたって居座るつもりよ？」
にっこり笑ってパティスが返す。

「――お帰り、パティス……」

そんな彼女を更に一層強く抱きしめると、ブレイズは今までずっと夢見てきた言葉を口の端に乗せた。

その声は、先ほどみたく月光に吸い込まれることなくパティスの耳朵に届く――。

「ただいま……！」

――今度こそ、彼を一人ぼっちにはさせません。
ブレイズの腕のなかで、パティスは満月にそう誓いを立てた。

自分の居場所は、ブレイズの腕のなかにしかないのだから。
そうして多分、ブレイズの居場所も。

そう思ってもう一度空を見上げると、今まで気付けなかったのが不思議なくらい強い輝きで、二つの星が瞬いていた。

それは、満月にも負けない光を放ってパティスたちを見守っていた――。

【F.i.C】

- 18 - (後書き)

最後まで読んでくださって有難うございましたm()m
評価や感想などいただけると嬉しいですよ(*ω*)o

このお話、今現在続編を連載中です。
タイトルは「光と闇の境界線」です。

こちらにも連載開始しましたら「月夜の約束」のようにごひいきに
して

いただければ幸いですm()m

参考：<http://ncode.syosetu.com/n3072b/>

→続編「光と闇の境界線」URL。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2519b/>

月夜の約束

2010年10月8日13時43分発行